



TITLE:

唐代兩京郷里村考

AUTHOR(S):

愛宕, 元

---

CITATION:

愛宕, 元. 唐代兩京郷里村考. 東洋史研究 1981, 40(3): 438-479

ISSUE DATE:

1981-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153836>

RIGHT:

## 唐代兩京鄉里村考

愛宕元

はじめに

一 西京長安

二 東京洛陽

三 地圖上への比定

はじめに

「諸る戸は、百戸を以て里と爲し、五里を郷と爲し、（中略）里毎に正一人を置く。戸口を按比し、農桑を課植し、非違を檢察し、賦役を催驅するを掌る。（中略）田野に在る者を村と爲し、別に村正一人を置く」と戸令に規定されるごとく、唐代の郷里制は、造籍や勸農、さらには治安維持や徴税といった、地方行政上の末端として種々の機能を果すべく組織された人爲的行政單位であった。五百戸を一郷、百戸を一里とするこの郷里の下に、さらに複數の村が含まれる。村は農耕經濟に主として依存する限り、土質や水利環境、地勢的あるいは氣候など、あらゆる農業立地上の諸條件によって、その戸數規模に一定の制約を受けざるを得ない自然村落である。主要な生産構造が農耕である當該時代にあつて、最も普遍的な自然村落とは、農村であることは言うまでもない。もち論、村落構成員の在地郷村における政治的、經濟的、社會的影響、言い換えれば、公權力との關連の仕方、土地所有の規模、傳統的門地などによって、これら自然村落はそれぞれ自己發展の歴史を有し、將來においてもあり得るであらう。それはともかく、一般論として言えば、村、即ち自然村落は、

血縁的あるいは地縁的な關係で結合された現實の農民生活の最小單位であり、かつ世界であつた。

唐代鄉村研究において、人爲的な郷里制と、自然村落たる村の兩面からの考察が必要であることは言うまでもなからう。制度と實體の具體的な關係の解明が求められるのである。制度上の郷里制がその規定戸數をほぼ滿し、末端機能をある程度果したと考えられる前半期に對し、後半以降においては、本來の制度的戸數單位を大幅に縮小して再編せねばならないことになる<sup>(2)</sup>。つまり、唐朝權力による農民把握能力が著しく低下したがための、鄉村再編がなされる。一方、自然村落たる村にはいくつかの注目すべき變化ないし自己發展を後半期に認めることが出来る。かつて、唐代前半期と後半期の同族村落について、以上のような觀點から考察を加えた<sup>(3)</sup>。もっとも、それらで考察した村落は、前半期及び後半期の普遍的な自然村落と必ずしも言えない側面を有しているものであつた。そのために、唐代を通じての村落について、より基礎的作業から始める必要を痛感し、その一つの作業過程として、唐代全般にわたる郷・里、及び村の檢索とそれらの立地や規模などを含めた歴史地理學的な検討を始めたところである。本稿はその基礎作業の一として、唐代（一部隋代及び五代を含む）の長安と洛陽という兩京管下の郷・里、及び村の復元と位置比定を試みることによって、兩京郊外地區を含めた、いわば首都圈としての廣がりを視野に入れ、兩京のもつ歴史地理學的な意味を浮び上がらせようと意圖するものである<sup>(4)</sup>。

以下に舉げる唐代兩京管下の郷・里、及び村は、墓誌銘を主とし、その他に佛教信者の供養塔銘や經幢銘などの石刻編纂史料を参照するとともに、最近の中國での發掘報告類に散見する新出墓誌銘を出来る限り參照して檢索したものが大半を占める。したがって、これら郷・里、及び村は、一部に第宅地を含むが、多くが葬地、あるいはそれに準ずる地であつて、當時の生きた人間の生活空間とは微妙にずれるところもあることを一應は念頭に入れておかねばならないであらう。このような史料上の制約から、なお檢索し得なかつた郷・里、とりわけ村が多數存在するはずで、この點は特に今後ともに續續と發掘されるであろう新出墓誌銘類によって補わねばなるまい<sup>(5)</sup>。

ところで、清の徐松撰・張穆校補『唐兩京城坊攷』をはじめとして、平岡武夫編『唐代の長安と洛陽』（『唐代研究のしお

り』所收) など、唐代兩京の城内に關してはすでに詳細な考證研究があり、この點ではほぼ完璧に近い文獻學上の成果を我々はもっている。また中國での現今の活潑な歴史考古學的調査やそれに基づく諸研究も、唐代兩京に關しては、その主たる關心は舊城域や城内の復元にあるように思われる。そのなかで、武伯綸氏の「唐長安郊區的研究」と「唐萬年・長安縣鄉里考」<sup>(6)</sup>は、我々がその存在さえ知り得なかった多數の新出墓誌銘を利用し、萬年縣四十鄉(うち一鄉は北周鄉名であり、本稿では除外)、長安縣三十鄉を明らかにされた。本稿の長安の鄉名部分で重複する所が少なくないが、さらに數鄉を加えるとともに、武氏の論考のいくつかの點に補正や修正を加えたので、重複のそしりはまぬがれるものと思う。

なお、郷の地圖上への比定作業に關する考證等は全て註を参照されたい。

# 一 西 京 長 安

## a 萬年縣所管<sup>(7)</sup>

郷里村名	所載墓誌等	時期	出典・出土地
①雍州大興縣涇川鄉孟顯達碑長樂里	孟顯達碑	開皇20	續陝西通志稿卷一四一「武伯綸『唐長安郊區的研究』」
京兆郡大興縣涇川鄉姬威墓誌	姬威墓誌	大業6	文物一九五九・八「陝西郭家灘(8)隋姬威墓清理簡報」
京兆郡大興縣東白鹿原涇川鄉	劉世恭墓誌	大業11	考古學報一九五六・三「西安白鹿原墓葬發掘報告」(9)
雍州萬年縣涇川鄉李思貞墓誌	李思貞墓誌	神龍1	武氏前掲論文(10)
務政里長樂原			

萬年縣涇川鄉之白任夫人墓誌	鹿原	神龍3	考古通訊一九五六・六「西安郭家灘唐墓清理簡報」
萬年縣涇川鄉白鹿原史禮墓誌	萬年縣涇川鄉白鹿原	天寶3	武氏前掲論文(11)
萬年縣涇川鄉涇川王訓墓誌	萬年縣涇川鄉涇川	大曆2	金石萃編卷九四(12)
萬年縣涇川鄉鄭城曹景林墓誌	萬年縣涇川鄉鄭城	建中3	西安郊區隋唐墓
京兆府萬年縣涇川李文正墓誌	京兆府萬年縣涇川	大和4	同前
鄉鄭村(13)	鄉鄭村(14)	大和9	武氏前掲論文(15)
長安東涇川鄉崇義張榮恩墓誌	長安東涇川鄉崇義	會昌1	同前(16)
里鄭村北二里之地	里鄭村北二里之地		
京兆府萬年縣涇川劉士環墓誌	京兆府萬年縣涇川		

[illegible]

萬年縣長樂鄉界南段伯陽墓誌	龍朔1	六年出土
窰村	同前	一九五六年出土
城東龍首原長樂鄉張君夫人田氏墓天授3	八瓊室卷四〇	
王柴村、向南與壽誌		
春坊路通也、其地		
北帶涇渭、西望秦原。		
京城東長樂鄉春明李崇望夫人王氏墓	天冊萬武氏前揭論文 一九五	
里	歲1	五年出土
萬年縣長樂鄉古城張景墓誌	神龍1	續陝西通志稿卷一四四
之陽		
萬年縣長樂鄉界龍薛莫及夫人史氏	開元16	考古通訊一九五六—六
首之原	合耐墓誌	「西安東郊唐墓清理記」
萬年縣長樂鄉	董楹墓誌	元和1
	董茂夫人楊氏墓	元和6
	張十八娘子墓誌	元和13
(萬年縣長樂鄉)	張十八娘子墓誌	同前
王柴村	隴西李夫人墓誌	元和14
萬年縣長樂鄉王柴村	史用誠神道碑	大和4
京兆府萬年縣長樂鄉宋侯之西原	王善相夫人祿氏	永隆2
⑤京城南洪固鄉界韋曲	關中金石文字存逸考卷一 旬齋卷一九	武氏前揭論文

京兆府萬年縣洪固鄉胄貴里	韓滉行狀	貞元2
萬年縣洪固鄉胄貴里	渾侃神道碑	咸通3
萬年縣洪固鄉延信里司馬邨	馬實墓誌	貞元14
長安城南少陵原司馬村	杜詮墓誌	沒年未詳
少陵司馬村	杜牧白撰墓誌	大中7
萬年縣洪固鄉之畢原	尼韋契義墓誌	元和13
萬年縣洪固鄉畢原	韋端玄堂誌	元和14
萬年縣洪固鄉北章村	吳達墓誌	大和4
萬年縣洪固鄉北章村	魏邀夫人趙氏墓誌	會昌4
⑤京兆府萬年縣洪固鄉34福潤里	唐左街僧錄偏覺大師智慧塔銘	廣德2
⑥萬年縣神禾鄉孫村	唐左街僧錄偏覺大師智慧塔銘	廣德2
⑦京兆府萬年縣崇德鄉文圓里	表制集卷一「降誕日請度七僧祠部敕牒」	廣德2
⑧京兆府萬年縣積福鄉積德里	大曆3	同前卷二「請度掃灑先師龍門塔所僧制」

⑨京兆府萬年縣安寧鄉永安里 ⑩萬年縣義善鄉(37) 萬年縣義善鄉大仵村鳳樓原 京南大仵村 ⑪雍州萬年縣樂遊鄉(39)	女子唐端墓誌 李推賢墓誌 王同人墓誌	大曆3 同前卷一「降誕日請度三僧制」T52·837a 開元12 古誌石華卷一〇 唐文拾遺卷六六 乾符3 武氏前揭論文(38)	836a 同前卷一「降誕日請度三僧制」T52·837a 開元12 古誌石華卷一〇 唐文拾遺卷六六 乾符3 武氏前揭論文(38)	開元16 續陝西通志稿卷一四六 武德2 冊府元龜卷一三八帝王部旌表二唐高祖「旌表孝友詔」 武德2 同前同條	大和3 關中金石文字存逸考卷五 唐文續拾卷五 大和2 西安郊區隋唐墓 郭家灘出土 大和3 八瓊室卷七五	萬年縣崇義鄉白鹿魚君夫人鄭氏墓誌 鄉曰崇義、村曰南王守琦墓誌 姚里 萬年縣崇義鄉懷信里南姚村 萬年縣崇義鄉涇川西原 ⑭萬年縣龜川鄉 萬年縣龜川鄉細柳原(41)	李儼墓誌 李沖叔墓誌 劉遵禮墓誌 何溢墓誌 李儼墓誌 李儼墓誌 李儼墓誌 李儼墓誌 李儼墓誌	永泰1 華卷九五〇 常袞制詔集卷一七 文苑英華卷九三五 永淳1 楊盈川集卷九 文苑英華卷九五〇 咸通9 金石萃編卷一一七 大中4 西安郊區隋唐墓 韓森寨出土 大中3 八瓊室卷七五	⑮萬年縣加川鄉 ⑯銅人鄉銅人里 萬年縣銅仁鄉 京兆府會昌縣(44)銅人原 信義里之銅人原(46) 萬年縣同仁鄉仇白村 ⑰國東門之外七里、鄉曰慶義、原曰嵩原 ⑱雍州明堂縣(43)義川鄉 雍州明堂縣義川鄉 ⑲唐永徽五年、京城外東南有坡、名獨嘉嘴、有靈泉鄉(50)、里長姓程名華、秋季輸炭時、程華已取一炭丁錢足云々 ⑳咸寧縣(51)黃臺鄉	韋端夫人王氏墓大曆13 關中金石文字存逸考卷二 金石續編卷九 武氏前揭論文(42) 郭榮神道碑 貞觀12 武氏前揭論文 獨孤思敬及夫人景龍3 考古通訊一九五八一「西安郊區三箇唐墓的發掘簡報」(43) 吳巽墓誌 天寶7 武氏前揭論文(45) 吳貴夫人韓氏墓廣德2 西安郊區隋唐墓 洪慶村出土 楊君夫人李氏墓大順2 旬齋卷三六 李觀墓誌 年不詳 朱文公校昌黎先生集卷二四 文苑英華卷九四六 八瓊室金石祔偽(47) 濟度寺比丘尼法永隆2 關中金石文字存逸考卷五 唐文拾遺卷六四 濟度寺比丘尼法永隆2 關中金石文字存逸考卷一 八瓊室卷三九 樂法師墓誌(49)	天寶12 金石萃編卷八九 法苑珠林卷五七 債負篇T53·721b 天寶12 金石萃編卷八九	天寶12 金石萃編卷八九 天寶12 金石萃編卷八九	天寶12 金石萃編卷八九 天寶12 金石萃編卷八九	天寶12 金石萃編卷八九 天寶12 金石萃編卷八九	天寶12 金石萃編卷八九 天寶12 金石萃編卷八九	天寶12 金石萃編卷八九 天寶12 金石萃編卷八九	天寶12 金石萃編卷八九 天寶12 金石萃編卷八九
--	--------------------------	---	--	--	--	---	--	---	--	--	---	------------------------------------	------------------------------------	------------------------------------	------------------------------------	------------------------------------	------------------------------------

萬年縣界黃臺鄉	大曆12	舊唐書卷一一八元載傳
②①京兆府崇道鄉齊禮	開元18	武氏前揭論文 一九五
里白鹿原之右	五年郭家灘出土	
萬年縣崇道鄉西趙	元和5	白氏長慶集卷二五 文
原	苑英華卷九三五	
京兆府萬年縣崇道鄉王李經墓誌	大和8	武氏前揭論文 一九五
鄉夏里	二年霸橋東南下家村出土	
京兆萬年縣崇道鄉馮宿神道碑	開成1	金石萃編卷一一三
白鹿原	開成5	武氏前揭論文 霸橋新
京兆府萬年縣崇道安王墓誌	興堡出土	
鄉之原	大中5	續陝西通志稿卷一五二
萬年縣崇道鄉只道	大中8	武氏前揭論文 一九五
里	四年郭家灘出土	
萬年縣崇道鄉白鹿路全交墓誌	咸通8	續陝西通志稿卷一五三
原	咸通14	武氏前揭論文 一九五
萬年縣崇道鄉夏侯楚國夫人楊氏墓誌	咸通14	武氏前揭論文 一九五
村	咸通14	武氏前揭論文 一九五
萬年縣崇道鄉蛇村	咸通14	武氏前揭論文 一九五
里	咸通14	武氏前揭論文 一九五
②②萬年縣霸城鄉	開成2	西安郊區隋唐墓 韓森
霸城	開成2	西安郊區隋唐墓 韓森
京兆府萬年縣霸城王公素墓誌	大中13	續陝西通志稿卷一五二
鄉招賢里	大中13	武氏前揭論文 64
②③霸橋東有大陵鄉	長安志卷一一	萬年縣條
②④京兆咸寧縣義豐鄉	天寶13	續陝西通志稿卷一四七
皇第五孫女墓誌	天寶13	續陝西通志稿卷一四七

萬年縣義豐(鄉)	和政公主神道碑	廣德2	顏魯公文集(三長物齋叢書本)卷八
萬年縣義豐鄉銅人	宜都公主墓誌	貞元19	武氏前揭論文 一九五五年霸橋東南惠家村出土
義豐鄉銅人原	李瞻夫人蕭氏墓	元和7	同前 一九五六年霸橋東南路(魯)家灣出土
義豐鄉銅人原	李穆墓誌	大和7	同前 一九五六年霸橋東南紅(洪)慶村出土
咸寧縣洪原鄉少陵	清源縣主墓誌	至德2	文物參考資料一九五八一〇「西安南郊龍(龐)留村的唐墓」
萬年縣洪原鄉之少陵	濟神道碑及墓	大曆11	武氏前揭論文
陵原	誌		顏魯公文集(四部叢刊本)卷八及一〇續陝西通志稿卷一四八
萬年縣洪原鄉少陵	辛祕碑	元和15	文苑英華卷九二五
京兆府萬年縣芙蓉	韓洄行狀	貞元13	權載之文集卷二〇文苑英華卷九七三
京兆府萬年縣青蓋	徐申行狀	元和1	李文公文集卷一一文苑英華卷九七六
京兆府大興縣進賢	劉世恭墓誌	大業12	考古學報一九五六一三「西安白鹿原墓葬發掘報告」
雍州明堂縣進賢鄉吳氏女	奈波羅磚	儀鳳3	武氏前揭論文 一九五



②9 萬年縣龍首鄉①神 鹿里 萬年縣龍首鄉之神 鹿里 萬年縣龍首鄉成義 里鳳栖原 萬年縣龍首鄉龍首 原	墓誌 顏川太夫人陳氏 神道碑 楊思勗墓誌 王公夫人李氏墓 杜行方墓誌	開元 9 開元 28 大和 6 大和 7	六年韓森案出土 張說之文集卷二一 苑英華卷九三四 武氏前揭論文② 八瓊室卷七二 金石續編卷一〇 古誌 石華卷一八 八瓊室卷 七十二③
③0 京兆郡大興縣御肅 鄉便子谷 萬年縣御宿川大曲 萬年縣雲宿鄉 萬年縣雲宿鄉 之岡	王磨侯舍利塔記 韋公夫人裴氏墓 景龍 3 眞空寺尼章提墓 梁羅墓誌	大業 5 大業 3 長安 3 大業 4	金石續編卷三 續陝西通志稿卷一四五 武氏前揭論文④ 古誌石華卷二五 武氏 前揭論文 嘉慶咸寧縣志卷二⑤
③1 京兆郡山北鄉樊川 之岡	梁羅墓誌	大業 4	武氏前揭論文
③2 萬年縣白鹿鄉①	齊紹業墓誌	長安 3	武氏前揭論文 一九五
③3 大興縣永寧鄉 安邑里民尹家故 人婦女王銘記	大業 11	同前①	四年郭家灘出土
③4 萬年縣雲門鄉 劉奇秀夫人駱氏 墓誌	元和 3	同前	
③5 大興縣大明鄉 呂曇殘碑墓記	大業 3	同前	一九五五年西安
③6 雍州大興縣安盛鄉 李文都碑銘	大業 1	同前	東郊韓森案出土 一九五四年郭家

<p>③⑦萬年縣上好鄉洪平原 萬年縣上好里洪平原</p> <p>③⑧京東渭陰(鄉)洪陂坊側</p> <p>③⑨少陵鄉① 在(萬年)縣南三十里</p> <p>④⑩薄陵鄉① 在縣東三十五里</p> <p>④⑪東陵鄉① 在縣東三十里</p> <p>④⑫苑東鄉① 在縣東北二十里</p>	<p>白居易撰永穆公年不詳主墓誌(?) 德宗賢妃韋氏墓元和4誌③</p> <p>貞觀18續高僧傳卷二七· 683b 武氏前揭論文③</p> <p>長安志卷一 萬年縣條⑦①</p> <p>同前</p> <p>同前</p> <p>同前</p>	<p>難國綿四廠附近出土</p> <p>長安志卷一 萬年縣條畢沅注</p> <p>白氏長慶集卷二五</p>
<p>b 長安縣所管④</p>		
<p>①京兆郡長安縣龍首鄉①興臺里 雍州長安縣龍首鄉興臺里</p> <p>長安縣龍首鄉興臺里①村</p> <p>(長安縣)金光坊折君夫人曹氏墓開元11誌</p>	<p>尉富娘墓誌 劉世通墓誌</p> <p>永徽1 武氏前揭論文 一九五</p> <p>會昌3</p> <p>金石萃編卷六七</p>	<p>大業11 九 圖版四九八</p> <p>漢魏南北朝墓誌集釋卷</p> <p>五年西安西郊小土門村出土</p>

長安縣龍首鄉龍首夫人袁氏墓誌 原	聖曆2	同前卷六
京兆府長安縣龍首朱庭圻墓誌 鄉龍首里	元和3	武氏前揭論文 一九五 五年西安西郊土門村附 近出土
(長安)縣西龍首劉繼墓誌 鄉未央里祁村白帝 壇	大中2	何齊卷三三
長安縣龍首鄉祁村劉仕備墓誌	咸通7	金石續編卷一一 八瓊 室卷七六
②長安邑高陽鄉小 梁村	乾符2	宋高僧傳卷一七 T50 • 681b
③長安縣龍首原西距 阿城東建塋域…… 承平鄉	元和12	金石續編卷一〇〇 八 瓊室卷七〇
長安縣承平鄉史劉 邵才志墓誌	元和14	八瓊室卷七〇
長安縣承平鄉大嚴 墓誌	大和8	同前卷七二
長安縣承平鄉大嚴 陳士揀墓誌	開成5	古誌石華續編卷二
長安縣承平鄉龍首 李柳夫人宇文氏 墓誌	咸通8	八瓊室卷七六 何齊卷 三四
長安縣承平鄉小劉 荆從皋墓誌	咸通11	武氏前揭論文 一九五 五年今西關外飛機場附 近出土
④京兆府長安縣永平 茹義忠神道碑	天寶7	文苑英華卷九〇九
鄉阿房殿之墟 長安縣永平鄉靈安 里	開成9	武氏前揭論文 一九五 五年(阿房宮)遺址東 南賀家村出土
⑤長安縣永壽鄉畢原 韋瓊墓誌	天寶14	關中金石文字存逸考卷 一 八瓊室卷五八
長安縣永壽鄉高陽 原	大中4	八瓊室卷七五
永壽鄉姜村	陳鴻造佛頂尊勝 陀羅尼經幢	大中9 關中金石文字存逸考卷 四 嘉慶咸寧縣志卷二
⑥長安縣義陽鄉義 陽原	墓誌	崔君夫人獨孤氏 天寶2 何齊卷二四
長安縣義陽鄉	李朝成造佛頂尊 勝陀羅尼經幢	大中2 金石萃編卷六七 後漢乾 宋高僧傳卷一三 T50 祐3 • 787c
長安義陽鄉	釋善靜傳	續高僧傳卷二七 T50 • 681c
⑦長安縣昆明鄉魏 村	誌	楊君夫人趙氏墓 元和14 何齊卷三〇
昆明池北白村	釋普安傳	天寶3 何齊卷二四
⑧京兆龍門鄉 京兆府長安縣國城 門西七里龍首原龍 門鄉懷道里	索思禮墓誌	天寶3 何齊卷二四
長安縣龍門鄉石井 合耐墓誌	天寶15	關中金石文字存逸考卷 四 武氏前揭論文
⑨長安縣居德鄉龍首 沙陀公夫人阿史闌元	天寶7	八瓊室卷七二
關中金石文字存逸考卷	天寶8	關中金石文字存逸考卷

原 <sup>99</sup>	那氏墓誌	三 唐文拾遺卷六五 貞觀中續高僧傳卷二八 <sup>100</sup> 8 · 680 <sup>b</sup>	
⑩京城西南豐谷鄉福釋遺俗傳			
⑪長安縣渭陰鄉	安附國神道碑 <sup>101</sup> 永隆 2	長安志卷一二長安縣條	
⑫長安縣孝悌鄉	唐仕安造佛頂尊開成 4	文苑英華卷九二〇	
孝悌鄉程劉村	勝陀羅尼經幢	續陝西通志稿卷一五二	
京兆府長安縣孝悌鄉九子村	尊勝陀羅尼經幢詳	武氏前揭論文	
⑬乾封縣 <sup>102</sup> 萬春鄉杜永村	王緒太夫人郭氏神功 1 墓誌	金石彙目分編卷一二之	
長安縣萬春鄉神和原	裴積墓誌	武氏前揭論文	
⑭長安縣醴泉(本)鄉	瑯琊王氏墓銘經乾符 1 幢	金石萃編卷八四 <sup>103</sup>	
⑮長安縣豐邑鄉 <sup>104</sup>	郭景墓誌	同前卷六七	
豐邑鄉馬鄔原	郭恆墓誌	聖曆 1 西安郊區隋唐墓 張家坡出土 <sup>105</sup>	
⑯雍州長安縣清化鄉	戚纂夫人趙氏墓	景龍 2 同前 同地出土	
⑰青槐鄉阿城原	王祥墓誌	貞觀 6 八瓊室卷三〇	
⑱其鄉曰豐樂鄉、在長安西。	種樹郭橐駝傳	上元 2 續陝西通志稿卷一六五	
⑲京南遠郊豐福二水之陰、鄉曰清官、里稱遵善。	釋道宣「開壤創築戒場壇文」	乾封 2 全唐文卷九一一 武氏前揭論文	
⑳長安西北界靈臺鄉豐水上			
㉑京兆長安縣龍泉鄉李鎬墓誌			
㉒京兆府長安縣居安鄉高陽原	李府君夫人王氏開元 2 墓誌	續陝西通志稿卷一四五	
㉓長安縣禮成鄉洽恩里	楊士貴碑銘記	武氏前揭論文	
㉔長安縣修仁鄉	趙長述碑銘	貞元 9 權載之文集卷二一 武氏前揭論文 <sup>106</sup>	
㉕京師弘政鄉敬仁里	扈志碑	仁壽 1 武氏前揭論文 一九五	
㉖大興城西南合郊鄉	扈志碑	開皇 17 同前 同年同地出土 <sup>107</sup>	
㉗京城西延平門外二里司農鄉		開皇 14 關中金石文字存逸考卷五 武氏前揭論文	
㉘長安大統鄉昆明池南居賢邸		開皇 14 同前	
㉙梁升鄉蘭陵里		景龍中 長安志卷一二長安縣條所引「景龍文館記」 <sup>108</sup>	
㉚善政鄉 <sup>109</sup> 在(長安)縣西二十五里、		長安志卷十五鄠縣條所引「李順興先生古記」 <sup>109</sup>	
		遊城南記 <sup>110</sup>	
		長安志卷一二長安縣條	

## 管安化里

③①同洛鄉 在縣西南

四十里、管安寧里

③②苑西鄉 在縣北三

里、管崇微里

③③華林鄉 在縣南十

五里、管居安里

## c 所管鄉未詳の里・村

同前

同前

同前

少陵原黃渠里 姚南仲神道碑

雍州萬年縣閭村、  
即灊渭之間也。

國門之南費村 陸元方墓誌

光泰門外米倉村

苑牆神巖村

樊村

京師之南小趙村 梁肅墓誌

萬年(縣)楊村 任估墓誌

萬年縣李姚村白鹿 梁守謙墓誌

原

杜城村

柳氏塲女老師墓

程修己墓誌

京兆府萬年縣姜尹

貞元19 權載之文集卷一四

永徽末 法苑珠林卷九四酒肉篇

出冥報拾遺 T.63・980

大足1 文苑英華卷九三六

興元1 舊唐書卷一三三李晟傳

興元1 同前

永淳1 宋高僧傳卷四釋鑑基傳

貞元10 文苑英華卷九四四

貞元14 李文公集卷一四

大和1 續陝西通志稿卷一五一

會昌5 八瓊室卷七四

咸通4 金石續編卷一一 八瓊

室卷七六

萬年(縣)裔村庫楊等女母王氏墓咸通5 古誌石華卷二二

谷 誌

京兆府萬年縣小陽 李君夫人楊氏墓咸通14 同前卷二二

村 誌

龍首原隆安里 皇甫弘敬墓誌

長安縣德義里胡趙 魯謙墓誌

村

(長安縣)尙冠里

長安縣嚴村

京城西布政之原小 韓寶才墓誌

嚴村

金光門外小嚴村

楊君夫人趙氏墓元和14 旬齋卷三〇

城西小嚴村

京兆府長安縣小嚴

村 誌

長安縣第五村

長安縣南原姜允村 劉德章室女墓誌 乾符2 八瓊室卷七七

長安縣南原姜允村 楊發女子書墓誌 乾符5 同前卷七七

(終南山) 大萬村

(終南山) 程郭村

(終南山) 魏村

(終南山) 暉村

續高僧傳卷二七釋普安

傳 T.50・681c

同前 681c

同前 681b

同前 681b

## 二 東京 洛陽

a 河南縣管下<sup>(1)</sup>

郷里村名	所載墓誌等	時期	出典・出土地
①河南郡河南縣千金麻君夫人龐氏墓 <sup>(1)</sup> 華邑里	誌	大業8	漢魏南北朝墓誌集釋卷九 圖版四五六之二
城西北八里河南縣崔止師夫人封依千金郷	德墓誌	大業10	同前卷九 圖版四七七
雒陽縣千金郷靈泉 <sup>(1)</sup> 德墓誌	德墓誌	大業11	同前卷九 圖版五〇一
城北千金郷安川里那盧夫人元買得墓誌	墓誌	王世充同前卷九 開明1之一 (即武德2)	圖版五二五
河南縣千金郷千金唐遜夫人柳氏墓 <sup>(1)</sup> 里	誌	貞觀12	芒洛冢墓遺文四編卷二
河南縣千金郷北邱毗沙夫人楊氏墓 <sup>(1)</sup> 山之原	誌	貞觀16	芒洛四編卷二 <sup>(1)</sup>
洛城之北、邱嶺之張行滿墓誌	誌	貞觀22	同前卷二
陰十五里千金郷之地			
邱山之陽、去州城李智墓誌		永徽4	同前卷二 <sup>(1)</sup>
七里千金郷			
②河南縣平樂郷 <sup>(1)</sup> 王房寶墓誌		顯慶5	同前卷三

河南縣平樂郷王村房寶之男墓誌	合宮縣 <sup>(1)</sup> 平樂郷之王玄裕墓誌	龍朔1	芒洛續編卷中
杜郭村	河南縣平樂郷安善蕭瑤及夫人杜氏合耐墓誌	永隆2	同前卷三
里杜郭村	河南縣平樂郷杜郭周著墓誌	大和8	同前卷六
河南縣平樂郷杜郭	崔恕墓誌	長慶4	芒洛卷中
里	河南縣杜郭村孫宮墓誌	大中14	同前卷中
河南縣平樂郷杜郭	孫嗣初墓誌	咸通7	芒洛四編卷六
村善聖里	魏涿墓誌	咸通9	同前卷六
河南縣平樂郷杜郭	索玄墓誌	龍朔2	芒洛三編
河南平樂郷芒山之陽翟村 <sup>(1)</sup>	王立墓誌	顯慶2	芒洛四編卷二
芒山之陽翟村	北邱之阜翟村東南楊君夫人賈氏墓	證聖1	芒洛續編卷中
平樂里	誌	開元27	芒洛三編
河南縣平樂郷杜翟	趙庭秀墓誌		
村	東都芒山之陰杜翟裴復墓誌	元和3	朱文公校昌黎先生集卷二四 古誌石華卷一五
村	邱原杜翟里	開成2	芒洛四編卷六

河南縣杜翟村平樂	韋夫人墓誌	大中13	芒洛卷中
河南縣平樂鄉杜翟	韋塤夫人溫氏墓	會昌6	芒洛四編卷六
村	誌		
河南縣平樂鄉杜翟	朱敬之夫人盧氏	大中6	同前卷六
村	墓誌		
河南縣杜翟村平樂	韋夫人墓誌	大中13	芒洛卷中
鄉			
合宮縣平樂鄉王晏	邢彥褒墓誌	長安4	芒洛續補
村			
邙山北王晏村	裴坦墓誌	開元28	芒洛四編卷五
平樂鄉朱陽原	張詵夫人樊氏墓	貞元10	金石萃編卷一〇五 芒洛補遺
河南縣平樂鄉朱陽	衛景初墓誌	開成1	同前卷三二 芒洛卷中
村			
河□縣平樂鄉朱陽	吳君夫人曹氏墓	後唐同	芒洛四編卷六
村	誌	光2	
河南縣平樂鄉朱楊	張君夫人高氏墓	後唐清	芒洛續補
村	誌	泰3	
邙山之陽平樂鄉	樂達墓誌	咸亨1	芒洛卷上
合宮縣平樂鄉之北	楊令一碑	聖曆1	文苑英華卷九一〇 張
阜、郭門十里、邙			說之文集卷一七
山西岡			
合宮縣平樂鄉	王素臣墓誌	景龍1	芒洛三編
洛州城北十二里北	崔孝昌墓誌	景雲2	芒洛四編卷五
邙山平樂鄉			
河南縣平樂鄉張陽	王怡墓誌	開元20	同前卷五

里			
河南縣平樂鄉雀村	張鼎夫人魏氏墓	開元21	同前卷五
村	誌		
③河南縣龍門鄉午橋	張氏女孀墓誌	貞元17	芒洛卷中
村			
河南縣龍門鄉之午	韋珮母段氏墓誌	元和4	元氏長慶集卷五八
橋村			
河南縣龍門鄉午橋	黃順儀造佛頂尊	咸通7	八瓊室卷四八
村	勝陀羅尼經幢記		
④河南縣伊洛鄉	李旻墓誌	至德2	芒洛卷中 芒洛補遺
河南府河南縣伊洛	盧君夫人崔氏墓	大中10	金石續編卷一一
鄉解賈村	誌		
⑤河南縣伊洛鄉	李方父墓誌	元和9	芒洛卷中
龍門天關之南伊洛	臧協夫人向氏墓	元和10	同前卷三〇 芒洛補遺
鄉	誌		
河南縣伊洛鄉中梁	李君夫人鄭秀實	大中10	芒洛卷中
村	墓誌		
⑥河南縣鄭鄉	呂買墓誌	永徽1	同前卷上
河南縣鄭鄉	樂達墓誌	咸亨1	同前卷上
⑦合宮縣土城鄉	劉君夫人郭氏墓	萬歲登	芒洛續補
信里	誌	封1	
⑧河南縣長樂鄉	王遜墓誌	大和4	同前卷三一 芒洛卷中
原里			
⑨河南縣瀍澗鄉	張貞墓誌	顯慶4	芒洛四編卷三
山之陽			
⑩河南縣永泰鄉	趙師墓誌	總章1	同前卷三
⑪河南縣委桑鄉	李司徒亡女墓誌	開成4	芒洛續編卷下

⑫ 雒陽縣金谷里之北 釋智脫傳 邱山	大業3 續高僧傳卷九 199b
金谷鄉 邱山之陽 崔漪神道碑	垂拱1 張說之文集卷一九 文苑英華卷九三〇
河南縣金谷鄉澗水之(以下缺)	至德2 文物參考資料一九五六—五「洛陽一六區七六號唐墓清理簡報」 沈下賢文集卷五「歌業記」
唐貞元元年、洛陽金谷里有女子葉、學歌於柳恭云々	劉君夫人李氏墓 萬歲通天2 芒洛四編卷四
⑬ 永昌縣 伊水鄉	天2 樊川文集卷七 文苑英華卷九三八
⑭ 河南縣靈臺鄉 立行里	大中5 華卷九三八
⑮ 河南縣靈臺鄉	年代不詳 八瓊室卷三三龍門山造像一八四段之一
⑯ 東都西北十里 零淵鄉 合耐墓誌	大業9 漢魏南北朝卷九 圖版四六九
河南縣靈淵鄉安川里 蕭瑾墓誌	大業9 同前卷九 圖版四七三
靈淵鄉安川里 高嗣及夫人孟氏墓誌	大業10 同前卷九 圖版四八〇
· 蔡母氏合耐墓誌	大業11 同前卷九 圖版五〇四
零淵鄉翟村 董君夫人衛氏墓誌	大業12 同前卷九 圖版五一七
河南郡河南縣靈淵鄉翟村 唐直墓誌	芒洛三編
東都城北廿餘里 零楊厲墓誌	大業12 同前卷九 圖版五一〇
淵鄉零淵里	大業12 同前卷九 圖版五二三
東都北一十餘里 靈淵鄉安川里	大業12 同前卷九 圖版五一八
大微城 北靈淵鄉 唐世榮墓誌	大業11 同前卷九 圖版四九五
⑯ 河南縣靈泉鄉 龍蕭濱墓誌	大業7 同前卷一〇 圖版五四
⑰ 河南縣老子鄉 宮人魏氏墓誌	大業10 同前卷一〇 圖版五四
河南縣老子鄉 宮人元氏·陳氏墓誌	大業12 芒洛續編卷上 九·五五二
東都城北老子之鄉 大翟村 合耐墓誌	大業8 漢魏南北朝卷九 圖版四三七
⑱ 河南縣弘教鄉 合耐墓誌	大業11 同前卷九 圖版四八四
⑲ 河南郡河南縣崇美鄉 翟突娑墓誌	開皇20 同前卷八 圖版三九八
⑳ 河南縣保林鄉 崇訓里 劉多墓誌	開皇20 同前
㉑ (河南縣) 閑居鄉 劉多墓誌	開皇20 同前
(河南縣) 閑居鄉 劉寶及夫人王氏仁壽4 合耐墓誌	同前卷八 圖版四一三
東都城東北九里 閑蘇威夫人宇文氏墓誌	大業12 同前卷九 圖版五一五
居鄉 墓誌	大業9 同前卷九 圖版四六八
② 河南縣勸善鄉 恭趙朗及夫人孫氏墓誌	芒洛三編

安里

②河南縣通德鄉

合耐墓誌  
張儉及夫人胡氏仁壽3 同前卷八 圖版四一一  
之一

④河南縣殖業鄉④顯義里

合耐墓誌  
郭王墓誌

大業4 同前卷八 圖版四三三

⑤河南縣樂和鄉⑤樂和里

□君夫人王光墓誌

大業10 同前卷九 圖版四七五

⑥河南縣安樂鄉⑥安樂里

白仵貴墓誌

大業11 同前卷九 圖版四八六  
之一

⑦洛州歸歲鄉

□墮及夫人趙氏  
合耐墓誌

大業8 同前卷九 圖版四五七

⑧河南縣梓澤鄉⑧宣武里北邙原

謝彥璋墓誌

後梁貞 芒洛卷下  
明6

⑨河南縣永樂鄉徐妻李夫人墓誌

後晉天 同前卷下  
福5

⑩洛州河南縣崇政鄉

齊夫人墓誌

貞觀20 芒洛續編卷中

⑪河南府河南縣安樂鄉北邙山之原

王志悌墓誌

天寶10 芒洛四編卷五

⑫河南郡河南縣思順鄉

元鍾墓誌

大業7 芒洛四編補遺

⑬河南府河南縣洛苑鄉

王曙神道碑

宋景祐 河南先生文集卷一二

⑭河南縣洛苑鄉司徒里

王世隆神道碑

宋慶曆 同前卷一六

## b 洛陽縣所管

①洛陽縣平陰鄉①北邙之原

鄭瞻墓誌

永昌1 芒洛卷上

洛陽縣北平陰鄉安善里

劉穆墓誌

先天2 芒洛續編卷下

河南府洛陽縣平陰鄉北邙之里

李誕墓誌

開元11 芒洛卷中

洛陽縣平陰鄉陶村

崔程墓誌

貞元14 匄齊卷二八 芒洛卷中

河南縣北邙山南陶村

王君夫人橋氏墓誌

大足1 芒洛三編

邙山陶村之原

孫嘉之墓誌

開元27 文苑英華卷九五五

洛陽北陶村

孫廿九女墓誌

長慶3 芒洛四編卷六

洛陽縣平陰鄉王趙村邙山之陽

高岑墓誌

貞元14 同前卷六

(雒陽縣)東北五里王趙村

郭世昌墓誌

大業5 漢魏南北朝卷八 圖版四三四

洛陽縣平陰鄉三家店

李崗墓誌

元和12 芒洛三編

洛陽縣平陰鄉鳳臺里

劉君夫人王氏墓誌

乾符5 芒洛四編卷六

②雒陽縣東北馬安山

段濟墓誌

大業12 芒洛續編卷上 漢魏南北朝卷九 圖版五〇六  
之二

雒陽縣北鳳臺鄉安山里

李元及夫人鄧氏墓誌

大業12 漢魏南北朝卷九 圖版五〇七之二

洛陽縣鳳臺鄉穀陽里

韋匡伯墓誌

王世充 同前卷九 圖版五二六  
開明2 之二  
(即武)



③洛陽城之西北河南 縣清風鄉 <small>063</small> 洛陽北邙山之陽清 風里	高虬墓誌 崔志墓誌	貞觀1 芒洛四編卷二	仁壽1 三之二	同前卷一 圖版六〇	德3
雒陽縣清風鄉張方 里芒山之陽	段君夫人張氏墓 誌	貞觀2 同前卷二			
洛陽縣清風鄉邙山 之原	田博夫人桑氏墓 誌	乾封1 芒洛卷上			
清風鄉安樂里	蕭令臣墓誌	開元8 蜀齋卷二三		芒洛卷中	
洛陽縣清風鄉平樂	崔君夫人朱氏墓 誌	開元28 芒洛四編卷五			
河南洛陽之清風郡 (郷の誤り)平樂誌	陸翰夫人元氏墓	貞元25 元氏長慶集卷五八			
洛陽縣清風鄉郭村	李鼎墓誌	寶曆2 芒洛卷中			
③洛陽縣清封鄉 <small>063</small> 積 潤村	羅周敬墓誌	後晉天 金石萃編卷一二〇			
④洛陽縣都會鄉 <small>063</small> 神都洛陽縣都會鄉	司馬道墓誌 崔貴仁墓誌	儀鳳3 芒洛四編卷三			
河南縣都會鄉王趙 村 <small>063</small>	蕭貞亮墓誌	垂拱2 芒洛續編卷中			
⑤平洛鄉 <small>063</small> 洛水之北平洛鄉杜	袁秀巖墓誌 韓通墓誌	延和1 同前卷下			
澤村		元和4 芒洛三編			
徵安門 <small>063</small> 外十里之毛璋墓誌		後周期 芒洛卷下			
原杜澤村		後唐天 芒洛四編卷六			
		成4			

⑥洛陽縣上東鄉 <small>063</small> 邙山上東里 邙山之河陰鄉溷陽司馬寔墓誌 里 <small>070</small>	⑧洛陽縣平鄉遊仙遊 里 洛陽縣常平鄉仙遊 合耐墓誌 劉則及夫人高氏 大業7 同前卷八 圖版四四六	⑨洛陽縣常平鄉遊仙 里 洛陽縣常平鄉張田光山夫人李氏 墓誌 大業4 同前卷八 圖版四三三	⑩(洛陽縣)通閭鄉楊德墓誌 河南郡通閭鄉嘉慶田光山夫人李氏 墓誌 大業8 同前卷九 圖版四三三	⑪河南郡雒陽縣景福郭世昌墓誌 東都洛陽縣通閭鄉張達墓誌 鄉 <small>073</small> 景義里 大業10 同前卷九 圖版四七八	⑫(雒陽縣)感德鄉張志相夫人潘善 從善里 利墓誌 大業11 同前卷九 圖版四九六	⑬雒陽縣遵化鄉 合耐墓誌 范高及夫人蘇氏 大業6 同前卷八 圖版四三七	⑭首陽鄉 <small>074</small> 郭揆神道碑 天寶8 顏魯公文集卷五 永徽6 千唐誌齋藏石目錄	⑮洛陽縣淳化(俗) 效夫人墓誌 永徽6 千唐誌齋藏石目錄	⑯洛陽縣賢相鄉陶村符昭慰墓誌 河南洛陽賢相鄉靖衛景山墓誌 宋咸平 芒洛三編 4 宋康定 河南先生文集卷一三	永徽3 開元16 芒洛三編 垂拱2 芒洛卷上 景雲2 金石萃編卷六九 大業4 漢魏南北朝卷八 圖版 四二九之二 大業7 同前卷八 圖版四四六 大業8 同前卷九 圖版四三三 大業4 同前卷八 圖版四三三 大業8 同前卷九 圖版四三三 大業10 同前卷九 圖版四七八 大業5 同前卷八 圖版三三四 大業11 同前卷九 圖版四九六 大業6 同前卷八 圖版四三七 天寶8 顏魯公文集卷五 永徽6 千唐誌齋藏石目錄

問里	河南府洛陽縣賢相族姬趙氏墓誌	2	宋政和 芒洛四編卷六
鄉旌德里		6	
洛陽縣賢相鄉杜澤村	游安民墓誌	1	宋宣和 同前卷六

c 所管鄉未詳の里・村

北芒清善里	扶餘隆墓誌	永淳 1	芒洛四編卷三
洛陽縣樂城里	李瑱墓誌	開元 10	
洛陽縣伯樂里	傅良弼神道碑	大和 2	李文公集卷二三
洛陽縣北芒山王羽村	劉政墓誌	貞觀 16	芒洛四編卷二

三 地圖上への比定

唐代における西京長安の萬年・長安兩縣管下郷は、萬年縣については、『長安志』に四十五郷と記す。武伯綸氏は四十郷を挙げ、本稿では四十二郷を挙げることが出来た。長安縣については、『長安志』に五十九郷と記す。武氏は三十郷を挙げ、本稿では三十四郷を挙げ得た。<sup>(補注)</sup>東京洛陽の河南・洛陽兩縣管下郷は、『太平寰宇記』に河南縣四十郷、洛陽縣三十郷と記す。本稿では、河南縣三十三郷、洛陽縣十六郷を挙げることが出来た。<sup>(訂正)</sup>長安郊區に比して、洛陽郊區の郷數檢索率がやや低いのは、この地域の考古學的發掘調査の差、そして我々が入手し得る學術雜誌等での具體的な發掘報告や出土文物に關する情報の少なさに因るものである。某郷某里某村と葬地を具體的に記す墓誌銘がどの地點で出土したかは、郷里や村の位置比定にとって決定的な手掛りを與えてくれるものであり、長安郊區に關しては、武氏の論考とあいまって、

村	(洛陽縣) 伊楊村王留墓誌	咸亨 5	芒洛補遺
	・劉村		
河南縣王寇村	賈玄贊殯記	垂拱 1	芒洛四編卷三
邙山之足王寇村	杜夫人墓誌	貞元 5	芒洛卷中
夕陽村 <sup>(訂)</sup>	智元墓誌	開元 17	古誌石華卷一〇
河南縣侯村	盧寂墓誌	貞元 9	芒洛四編卷六
河南縣北邙山杜原村	孫謙墓誌	唐末	同前卷六

以上の配列は原則として年次の順に従ったが、同一郷内の同里・同村ないし同じ地點を示すと思われるものは、必ずしも年次の前後にこだわらずにまとめて記載したところがある。

出土地の判明する新出墓誌銘を多く利用出来たために、確度の高い比定が可能であった。周知のように、長安城内は朱雀門街の東半は宣陽坊に治所を置く萬年縣管下に屬し、西半は長壽坊に治所を置く長安縣管下に屬するが、城外郊區も朱雀門街の延長線、つまり、南郭正面の明德門から終南山に至る南北大道（天門街）によって、その東西郊區も萬年・長安兩縣のそれぞれの管轄に屬した。この明確な區劃も郷の位置比定に役立った。また、郊區に廣く點在する多くの古蹟に關する諸文獻の記述、とりわけ、宋敏求の『長安志』をはじめとする地方志類の豊富な言及が少なからず參考になった。

一方、洛陽郊區に關しては、一、二の新出墓誌銘を除いて、ほとんど全てを石刻關係を中心とした編纂文獻に據つたために、出土地點が全く不明で、その位置比定は、郷の名稱を唯一の手掛りにして各種文獻史料に傍證を求める方法をとつた。文獻と言つても、『長安志』に比肩するところの古地志はなく、『永樂大典』から拾つた徐松輯にかかる『元河南志』もわずかに四卷、しかも城内に關する記述にほぼ限られる。洛陽城内は、毓德坊に治所を置く洛陽縣が洛水以北を、寬政坊に治所を置く河南縣が洛水以南を、それぞれ管轄するが、禁苑地區である西郊を除き、郊區について兩縣の管轄區分がはなはだ明確さを缺き、同名郷がしばしば兩縣管下に見え、この點においても長安郊區に比して位置比定における困難さを倍加した。したがつて、洛陽郊區の郷の地圖への比定作業は確度の面で長安郊區に比してやや劣ることを認めざるを得ないし、また、いくつかの郷については全く比定不能であつた。今後の考古學的發掘、特に邙山地區の組織的發掘調査がなされれば、墓誌銘をはじめとした石刻史料が多數出土することは確實と思われ、大いに待たれる所である。ところで、舉げた里と村の地圖上への比定の試みは、ごく一部を除いて事實上放棄した。ベース・マップとした民國製五萬、十萬分之一地圖と對照することで、一、二の唐代村名の繼承殘存とおぼしきものを認めることが出来たが、里名に至つては、附圖の縮尺上の技術的問題はともかく、後述するように、抽象的命名がほとんどを占め、かつ更名を繰り返しており、比定作業は全く不可能であつたからである。

さて、兩京郊區の郷の分布を検討してみると、いくつかの注目に値する事柄が明らかになる。それらを以下に列擧して

おこう。

(一) 長安では東半の萬年縣管下、洛陽ではいずれの縣の管下に入るのか必ずしも明確ではないが、北部地區に比較的多くの郷の檢索と比定が示せた。萬年縣管下郷の場合、四十五郷中の檢索郷四十二郷で、その檢索率は九十三パーセント強にも達し、長安縣の五十郷中の三十四郷、六十八パーセントをはるかにしのぐ結果が出た。長安周辺の地形は、等高線が示す如く、東南から西北の渭水へと緩傾斜地形であつて、東方と東南方には、銅人原、白鹿原、少陵原などの丘陵地が少なからず點在し、死者の葬地として好んで選ばれたことが、墓誌銘を主材料とした郷の檢索率の高さにそのまま反映していると言える。また、これら墓誌銘は、そのほとんどが官位を有する人物ないしその夫人のもので、貴族・官僚層が主として萬年縣に多く住していたことも無關係ではなからう。洛陽では、北方の邙山地區が葬地として古來最も好んで選ばれてきたことは周知の事實であるが、唐代についても、そのことは利用し得た墓誌銘から一見して明らかである。具體的な郷里を記さずに、葬地としてただ「邙山之陽」とか「邙山之原」などと記す例は枚舉にいとまがない。

(二) 郷里制が人爲的に五百戸・百戸單位に上から自然村落を編成したものであるために、郷里編成上の戸數調整から、一つの自然村落を分割する場合もあり得たことが判る。萬年縣崇義郷懷信里の南姚村と同郷南姚里、河南縣平樂郷安善里の杜郭村と同郷善聖里の杜郭村、萬年縣姜尹村と長安縣姜允村など、里の單位百戸を上まわる自然村落の分割例と見なすことが出来る。このことは、兩京郊區に限られたことではなく、恐らく全國的に、特に狹郷地區では少なからずあり得たことと考えられる。

(三) 隋代の郷名が少なからず唐代にもそのまま踏襲され、隋唐政權の郷村統治の連續性をこの面から讀み取ることが出来る。この點も全國的に普遍化して認めうるものではないかと思われる。宋郷も唐郷名を繼承したものが多い。これは長安・洛陽がもはや首都の地位からはずされ、城内はもとより郊區においても人口が激減したという時代差に基づくものであろうし、また郷村編成理念が

大きく異なる唐郷と宋郷を單純比較するのも無意味であらう。

(四) 郷名、里名、村名をそれぞれ比較検討すると、命名基準とも言うべきものに差違があることに氣附く。郷名は山川や古蹟に因むものが多く見い出され、その意味で地縁性や時代的連續性が認められる。それと對照的に、里名のはほとんどは主として儒家的倫理觀をふまえたきわめて抽象的名稱である。また、孝子節婦の顯彰や官位榮達者が出たことなどにより、里名の改變がしばしば行なわれたことは唐代では決して珍らしいことではない。村名は大半が中核的な居住姓に基づくものと思われ、地縁的名稱もまま存在している。自然村落としてこれは言わば當然のことで、時代を超えた連續性が最も強いと言えよう。以上のように、郷・村と里の名稱に命名上の差違があるとすれば、それは郷里制の實體とも關わる重要な問題を含むことになる。唐令における里正の職掌が具體的かつ詳細に規定されるのに對し、郷の耆老父老郷長のそれはきわめて一般的なもの、その存在すら常ならずであることは周知の事實であるが、郷名と里名の命名上の違いも、このことと密接に關連すると考えられるのである。つまり、郷里制とは言うものの、唐朝權力の鄉村統治の主眼はもっぱら百戸を單位とする里にあったと言えよう。唐代中期以降の中央集權の急速な弛緩により、制度化當初の一郷五里の體制はもはや維持できなくなり、再編を餘儀なくされるが、一郷の里數を縮小した再編過程で、郷名はそれ自體更名されることなく繼承されるのに對し、新たに自然村を一定戸數單位に再編される里には、里名の改稱がなされる。この再編された里は當然、従前の里域より擴大されることが多いであらうが、とにかく里域の變更が必然的に伴う。従つて里名の改稱も自ずと必要とならうが、同時に、唐朝權力の側の、言うなれば期待と願望を込めたきわめて倫理性の濃厚な抽象名、すなわち、社會秩序を律すべき名辭が意識的に用いられたと考えられるのである。唐初、ひいては隋代以來、唐末五代に至るまで、同一郷の例はいくつも見い出せるのに對し、同郷内の同一里の例が、ほぼ同一時期の一、二の例を除いて皆無に等しいという事實は、上記の考えを裏附けるであらう。このように、里というものがきわめて人爲的なものである以上、當時の人々にとって里が必ずしも生活感覺になじんだものではなかったであらう。地縁性の強い郷名、そして村名がむしろ普

通の地名表記や呼稱として一般的に用いられたと思われる。郷名、里名、そして村名を全て記す例は少例にすぎず、某郷某原、某郷某村といった里名を記さない例が大半を占めることが、このことを物語るであらう。

(5) 萬年縣神禾郷、同樂遊郷、同義豐郷、長安縣義陽郷、河南縣郟郷、同王城郷、同金谷郷など、いくつかの郷名と折衝府名とが一致することは注記した通りである。これら兩京の折衝府に關する限り、主として城内に置かれているが、兩者の名稱の一致は何らかの關連を豫想させる。一つ考えられるのは、徵兵對象郷ではないかということであるが、上府千二百、中府千、下府八百という徵兵定員の規定からして、戸數五百の一郷のみが一府の徵兵對象地區であつたことはまず考えられない。京兆府内の折衝府は一三一府で領縣二十であるから、單純平均すると一縣當り六・五五府、河南府四七府で領縣二十であるから、一縣當り二・三五府となるが、兩京各二縣管下の郊區郷域の人口密度は特に高かつたから、實際の一縣當りの府數はさらに多いはずである。假りに一縣當り六・五五府の値を用いると、萬年縣四五郷では一府當り六・八郷、長安縣五九郷では一府當り九・〇郷となるが、實際の郷數はこの數値よりかなり低くなろう。ともかくも、一府の徵兵對象地區が一郷と云うことがあり得ないことは、以上から明らかである。とすれば、考え得ることは、折衝府と同名郷が他郷に比して人口稠密地區、あるいは富戸多丁戸が高率な地區であつて、府兵徵兵對象となる複數郷の核となるような地區ではなかつたかということである。前掲の兩京所在折衝府と名稱の一致する郷が、比定圖を参照すれば明らかのように、外郭に接するか、あるいはそれに比較的近鄰する地であることが、一つの傍證となるかも知れない。もっとも、このような折衝府と郷との關連は、他の州縣にまで視野を廣げての検討を要しよう。

## 註

(1) 『通典』卷三食貨三鄉黨條の開元二十五年令。

(2) 中村治兵衛「唐代の郷―元和郡縣圖志よりみた―」(『鈴木俊

(3) 拙稿「五代宋初の新興官僚―臨淄の麻氏を中心として―」

(『史林』五七―四 一九七四)、「唐代前半期の華北村落の一

教授還曆記念東洋史論叢」所收 一九六四)

類型―河南修武縣周村の場合―」(京大教養部『人文』二五

一九七九)

(4) 本稿は『中國聚落史の研究—周邊諸地域との比較を含めて—』(唐代史研究會報告第三集 一九八〇)に「稿」として發表したものを基礎としている。史料の一部を羅列したに止まった「稿」で豫告したように、しかるべき手を加えたのが本稿である。

(5) 新出墓誌銘類をまとめた出版が期待されるが、『解放後出土南北朝隋唐墓誌集』(假題)が文物局古文獻研究室と西安、洛陽の關係組織によって計畫中とのことであり、出版が待たれる(一九八一年一月の唐長孺氏の京都での講演「解放後魏晉南北朝隋唐史研究概況」レジュメによる)。

(6) 「唐長安郊區的研究」(『文史』第三輯 一九六三 一五七—一八三頁)、「唐萬年・長安縣鄉里考」(『考古學報』一九六三—二八七—九七頁)。ただし、後者には「唐長安郊區萬年・長安縣鄉里位置示意圖」を附すが、本文は前者を轉載したもの。後者末尾に「以上所引墓志碑石、凡是解放後發見的、原石均存陝西省博物館、因多數尚未發表、故未別注明出處」と記され、我々が實見し得ない多くの新出墓誌銘を武氏は引用されている。ちなみに武伯綸氏は論考執筆當時、陝西省博物館館長であった。ところで、武氏は郷の位置比定に直接關連する記事を含むはんの數例だけ、墓誌の具體的記事内容に言及されるのみである。本稿では、位置比定に少しでも手掛りを与えるものは、

一九六三年以降の考古學關係を中心とした中文雜誌類などで知り得た新出墓誌銘類を含め、檢出し得た郷里名の諸例を總て本文に掲げ、郷里名のみの諸例は注記するに止めた。また、郷里

名の地圖上への比定に關する考證も總て註で述べた。なお、本稿が八分通り成った段階で、東大東文研池田溫教授より武氏の論考の存在を知らされた。池田教授の懇切な御教示に記して謝意を表する。

(7) 宋敏求『長安志』卷十一萬年縣條「唐四十五鄉、霸橋東有大陵鄉、元載祖墓在黃臺鄉、眞光(貞元)中有霸城鄉、餘不傳。」  
(8) 出土地の郭家灘は、西安東郊の滻水右岸の丘陵地(唐代の白鹿原)北麓に位置する。唐長安城東郭から東へ約五・四キロ。『西安郊區隋唐墓』(中國田野考古學報告集 考古學專刊丁種第一八號 一九六六 科學出版社)所載の「西安郊區隋唐墓地位置圖」參照。

(9) 出土地は、西安東郊約九キロの滻水と灊水にはさまれた、やはり白鹿原北麓で、「發掘報告」では「發掘的地方、是在西距滻河約一二〇〇米左右的第二臺地上」とある。

(10) 一九五三年西安東郊高樓村出土。民國製五萬分之一地圖では、高樓村は後出の韓森寨北東に鄰接する位置にある。

(11) 一九五四年郭家灘出土。『陝西省出土唐俑選集』(陝西省文物管理委員會編 一九五八)參照。

(12) 「銘曰、龍渠之右、鳳城之東、云々。」

(13) 西安東郊韓森寨出土。韓森寨は唐長安城東郭の約二・五キロに位置する。前掲「西安郊區隋唐墓位置圖」參照。

(14) 韓森寨出土。

(15) 韓森寨出土。武氏云「銘文說、……東臨滻逝、西接城隍。是此鄉西界靠近東城垣的明證。」

(16) 武氏云「鄭村里當即鄭村、是此里似與崇義里接。」

- (17) 『金石萃編』王昶按語「幢建於萬年縣澧川鄉鄭村里。長安志、萬年縣不載此鄉名。惟云、澧水在縣東、北流四十里入渭。又云、長樂坡、在縣東北一十里。即澧水之西岸。十道志曰、舊名澧坂。此題云澧川鄉、疑卽長樂坡。」
- (18) 尙傳村、上傅村、上傅村は同一村であらう。尙と上は音通であり、傳は恐らく武氏の誤寫と思われる。
- (19) 管臺里も觀臺里と同一里であらう。
- (20) 鄉名のみの例として、大曆末年没の王郊墓誌（『匄齊臧石記』卷二八）に見える。
- (21) 武氏云「焦村之名今亦存在。在高望村西南附近。」民國製五萬分之一、十萬分之一地圖に見える。
- (22) 『長安志』卷十一萬年縣條「高望堆、長安圖曰、在延興門南八里。」武氏云「高望里今名高望堆、在韋曲西北原上。……是高平鄉位置在洪原鄉北、而與之接近、鄉名高平、蓋在原上。」
- (23) 『金石續編』陸耀遹按語「萬年縣寧安鄉三趙村、卽今咸寧縣南十五里三兆社。趙・兆音近而訛。社有鳳樓原。顏魯公撰顏勤禮碑、寧安鄉鳳樓原、亦其地也。」寧安鄉三趙村の例は他に、大和六年没の辛幼昌墓誌（『匄齊』卷三一「八瓊室」卷七二）、咸通十二年没の楊氏孀女墓銘（『續陝西通志稿』卷一六五、乾符五年没の錢氏女墓誌（同前卷一五三））に見える。
- (24) 武氏云「此志一九五五年出土於曲江池東南之三兆鎮附近之穆家村。……可見寧安鄉在唐代是京城南壁啓夏門外最近之鄉。」寧安鄉の鄉名のみの例は、廣明元年没の張師德墓誌（『八瓊室』卷七七）に見える。
- (25) 『長安志』卷十一萬年縣條「長樂驛、在縣東十五里。長樂坡下。……長樂坡、在縣東北一十里。」『唐兩京城坊校補』「紀聞（廣記卷百所引）、開元二十二年、京城東長樂村有私家齋僧、一僧云、適到澧水、見老僧坐水濱洗坐具。按此、長樂坡下有村、近澧水之證。」天寶四載没の蘇思勗墓誌に「萬年縣長樂原」とその葬地を記し、出土地は「此墓位在緯十路南側の一箇坡地上、距唐興慶宮遺址東南約〇・五公里」である（『考古』一九六〇—「西安東郊唐蘇思勗墓清理簡報」）。
- (26) 出土地は「西安市東郊經一東路北端、南距緯十街延伸段約一・七九米々」とある。
- (27) 長樂郷の郷名のみの例は、麟德二年没の趙宗夫人劉氏墓誌（『西安郊區隋唐墓』）、元和八年没の陳志清墓誌（『匄齊』卷三〇）などに見える。
- (28) 『長安志』卷十一萬年縣條「洪固郷、在縣南一十五里。」宋代洪固郷の例は、至和二年没の陳漢卿墓誌に「萬年縣洪固郷神禾原」（『歐陽文忠公文集』卷三〇）と見える。
- (29) 『匄齊』端方按語「據太平寰宇記、洪固、一作鴻固、在長安縣、南接咸寧縣界。謹按大清一統志、韋曲在咸寧縣南、三秦記、在皇子坡之西、韓鄭莊北、逍遙公讀書臺猶存、縣志、韋曲東西倚龍首、南面神禾、澇水繞其前、爲樊川第一名勝、諸韋世居於此。」
- (30) 『長安志』卷十一萬年縣條の畢沅注に挙げられている。
- (31) 同右。宋の張禮撰『遊城南記』に「迺登少陵原、西過司馬村。張注曰、……今萬年縣有洪固郷、司馬村、今在長安城東南、少陵在村之東北」とある。『嘉慶咸寧縣志』卷二唐萬年縣條に「案、洪固郷、迄今不改、司馬村在大兆社、延信里、當即



其地」と見え、同卷十に「大兆社、西北至縣治三十里」とある。民國製五萬分之一・十萬分之一地圖によれば、該當位置に司馬村が現存する。

③ 甸齋 按語「長安志、洪固郷在萬年縣南一十五里、管邨四十八、畢中丞沅注引路巖撰渾侃神道碑、有胄貴里、歐陽詹撰左驍衛將軍馬實墓誌、有延信里司馬村、而不及此誌之北韋村、可據此以補長安志之古村也。」

④ 洪固郷の郷名のみの例は、開元十一年没の韋鈞神道碑（『文苑英華』卷九二）、元和四年没の論惟賢神道碑（同卷九〇九）、元和九年没の王紹神道碑（同卷八九七）に見える。

⑤ 洞字は、唐代寫本黑板勝美氏藏本に個字に作る（『大正大藏經』校勘記参照）。したがって、洪洞（個）郷は、洪固郷と同じ郷であると思はれてよからう。なお、この敕牒は、池田溫「中國古代籍帳研究」（一九七九 東京大學東洋文化研究所）録文番號二三五に「唐廣德二年十月大興善寺請度七僧祠部敕牒」として移録されている。

⑥ 「張注曰、今屬鴻固郷。」『長安志』卷十一萬年縣條「少陵原、在縣南四十里、南接終南、北至澧水、西屈曲六十里、入長安縣界、即漢鴻固原也。」唐の郷里制崩壞後、宋代に再編された鴻固郷は、唐の洪固郷を核にして、前注⑤に引いた宋郷の例からもわかるように、その郷域を西南の神禾郷をも編入して大きく擴張したものと考えられる。谷霽光「唐折衝府考校補」京兆府條に神和府を擧げるが、神禾郷内に設置された折衝府であろう。

⑦ 池田前掲書同條參照。文圓里の圓字は、圓字と全くの同音、

かつ字形もきわめて近い。文圓里、即文園里とすれば、漢文帝霸陵を孝文園とも呼稱するから、崇德郷文圓里を霸陵の地に比定することが出来る。『史記』卷一一七司馬相如傳「相如拜爲孝文園令。（索隱 百官志云、陵園令、六百石、掌按行掃除也。）」（『漢書』卷五七下同文）、『漢書』卷五九張湯傳「會人有盜發孝文園瘞錢。（如淳曰、瘞、埋也、埋錢於園陵以送死也。）」などの記事を參照。

⑧ 貞元二十年没の唐敷墓誌に「萬年縣義善原」と見える（『權載之文集』卷二五『文苑英華』卷九五六）。郷名のみの例は、開元十六年没の王同人夫人裴氏墓誌（『續陝西通志稿』卷一四六）に見える。

⑨ 武氏云「大仵村在曲江池西南原上。是此郷在寧安郷東南。」

⑩ 『漢書』卷八宣帝紀神爵三年「春、起樂游苑。」同條師古注「三輔黃圖云、在杜陵西北。又關中記云、宣帝立廟於曲江池之北、號樂游。案其處則今之所呼樂游廟者是也、其餘基尚可識焉、蓋本爲苑、後因立廟乎。」『長安志』卷十一萬年縣條「樂游廟、在縣南八里、漢宣帝起樂游廟、在曲江北、亦曰樂游原。」谷霽光「唐折衝府考校補」京兆府條「樂遊府、……長安志、樂遊原居城之最高（今本無）。又杜牧詩樂遊原上望昭陵。是樂遊在京兆府內。張說之集、詔宴樂遊園詩、樂遊形勝地、表裏望郊宮。」

⑪ 武氏は崇義郷を「南姚當即南營、已見寧安郷内、是郷位置當寧安郷西」と比定するが、後の例に見えるように、郭家灘、韓森寨から墓誌が出土している以上、寧安郷の西に比定することは無理である。

(41) 『長安志』卷十一萬年縣條の畢沅注に擧げられている。細柳原は、同卷十二長安縣條に「細柳原、在縣西南三十三里」とあるが、龜川郷は萬年縣所管郷であり、『長安志』にいう細柳原の位置とは合わない。今は武氏の「此郷位置當在霸河之東、邵平店北一帶、應爲萬年縣最東の郷區」という比定に従つておく。

(42) 武氏云「太平寰宇記卷二五澧水條説、澧水、荆溪・狗枷川二水之下流也、是此郷或由狗枷川而得名、其位置可能在澧水上游。」『長安志』卷十一萬年縣條でも、十道志を引いて、澧水を「荆谿・狗枷二水之下流也」とする。ただ、『水經注』卷十九渭水條では、澧水と狗枷川を別水としている。今は前説に従う。民國製地圖では、澧水上流の一水を庫峪河と記す。狗と庫は音が近いから、庫峪河を狗枷川の轉訛と見なすことが出来る。

(43) 出土地は「西安城東三十餘里之霸橋區洪慶村南的地内」である。また本墓誌に關しては、『唐長安城郊隋唐墓』（中國田野考古報告集 考古學專刊丁種第二十二號 文物出版社 一九八〇）参照。

(44) 『新唐書』卷三七地理志「昭應縣、……天寶元年、更驪山曰會昌山、三載、以縣去宮遠、析新豐・萬年置會昌縣。」すなわち、萬年縣の東端地區である。

(45) 武氏云「一九五六年霸橋東南路家灣出土、……是此郷與龜川郷同爲萬年縣最東之郷。」民國製地圖には魯家灣として見える。

(46) 神龍四年遇害の成王李仁（千里）墓誌に「京兆郡之銅人原」（洪慶村出土）、開元十三年没の成王妃慕容氏墓誌に「京兆

人原」（同所出土）と見える（ともに『西安郊區隋唐墓』）。

(47) 『文苑英華』は「郷曰慶義郷、原曰嵩原」に作り、「八瓊室金石祔偽」は「里曰慶義、原曰嵩原」に作る。『嘉慶咸寧縣志』卷二唐萬年縣條では、この墓誌を引いて、慶義郷を「案、國東門七里、當在韓森、元興兩社中」と比定する。

(48) 『舊唐書』卷三八地理志「萬年（縣）。隋大興縣。武德元年、改爲萬年。乾封元年、分置明堂縣、治永樂坊。長安三年廢、復併萬年。天寶七載、改爲咸寧。乾元復舊也。」

(49) 比丘尼法樂、法燈は、唐初の南朝系名族蕭瑀のそれぞれ長女、五女である。『金石萃編』卷五四に收める「濟度寺比丘尼法願法師墓誌」は、その四女で、葬地は「少陵原之側」である。三姉妹はともに出家して濟度尼寺にあり、その葬地も當然同一地であろうから、義川郷は長安南郊少陵原上の地に比定できる。

(50) 武氏云「此爲供應唐長安城內貴族薪炭の郷、必是萬年縣東南接近南山的郷區。」『法苑珠林』原文は、「有靈泉。郷里長姓程名華。」と句讀すべき可能性もある。だとすれば、靈泉郷は存在しなくなる。

(51) 前注(49)参照。

(52) 武氏云「只道亦作軺道、是劉邦受秦王子嬰降處、……此可視爲崇道郷の北邊。」『元和郡縣圖志』卷一關内道京兆府萬年縣條「故軺道、在縣東北一十六里。」『長安志』卷十一萬年縣條「軺道、在通化門東北十六里。」

(53) 『長安志』卷十一萬年縣條「眞光（貞元の誤り）中、有霸城郷。」『嘉慶咸寧縣志』卷二唐萬年縣條「案、霸城郷、當即霸

城故址。」霸城に關しては、『水經注』卷十九渭水篇に「自新豐故城西至霸城五十里、霸城西十里則霸水、西二十里則長安城、應劭曰、霸水上地名、在長安東二十里（三十里の誤りか）、即霸城是也」とあり、『長安志』卷十一萬年縣條に「霸城故城、在縣東北二十五里霸水之東、……郡國志曰、在通化門東二十里」と見える。

64 武氏云「南畝村名已見前長樂鄉、是此鄉位置似在長樂鄉之北、西接禁苑、東邊可能亦跨過霸河。」しかし、南畝村を長樂鄉内のそれと同村と見なす必然性はなく、むしろ、前注63のよう、に、霸城故址を郷名の由來と見て位置比定する方が妥當であろう。

65 『嘉慶咸寧縣志』卷二唐萬年縣條「案、今霸橋以東銅人原上有大冢三、疑即大陵所由名也。」武氏云「杜曲北原上有漢宣帝許皇后墳、北距漢宣帝墳杜陵約七八華里、因體積較杜陵爲小、故稱少陵。唐有少陵鄉、大小相對、杜陵當有大陵之稱、而杜陵附近區劃、當亦稱大陵鄉、如果此說不錯、則大陵鄉位置在少陵原上、不能列在霸橋以東。」今は武氏說に従う。

66 羅振玉『唐折衝府考補』京兆府條に義豐府を擧げる。

67 『陝西省出土唐俑選集』では出土地を「西安路橋」と記す。

68 武氏云「此墓誌一九五八年由西安城南興教寺北原上龐留村出土。」興教寺は、『長安志』卷十一萬年縣條「興教寺、在縣南五十里」、足立喜六『長安史蹟の研究』（二二六頁）「西安城外南方四十支那里の少陵原上にある」などの記事によって正確な位置が判かる。

69 他にも洪原（源）郷少陵原と記す例が、開成二年没の岐陽公

主墓誌（『樊川文集』卷八『文苑英華』卷九六九）、大中五年没の杜顓墓誌（同卷九 同卷九五八）に見える。

60 『遊城南記』（張注曰、芙蓉園在曲江之西南、隋離宮也。……園内有池、謂之芙蓉池、唐之南苑也。）『資治通鑑』卷一九四貞觀七年十二月條胡注「景龍文館記、芙蓉園在京師羅城東南隅、本隋之離宮也。」『太平御覽』卷一九七所引『天文要集』

「芙蓉園、本隋氏之離宮、居地三十頃、周廻十七里、……宇文愷營建京城、以羅城東南地高不便、故缺此隅頭一坊餘地、穿入芙蓉池以虛之。」『唐兩京城坊志』卷三「芙蓉園、攷太平寰宇記、曲江與芙蓉園相連。李肇國史補謂、……即今京城東南隅曲江池、是同爲苑地、不容中隔、立政・敦化二坊、今移於此。」平岡武夫編『唐代研究のしおり』第七「長安と洛陽 地圖篇」（一九五七）七五〇七八頁參照。

61 龍首郷は萬年・長安兩縣に見える。各史料の記載に従って、それぞれの縣の管下に區別しておく。しかも、檢索し得た諸例によって位置比定すれば、明らかに萬年縣龍首郷と長安縣龍首郷とは郷域を異にする別郷である。『長安志』卷十一萬年縣條「龍首郷在縣東一十五里。」

62 武氏云「神鹿里之名今尚存、……位置在韓森寨東南、郭家灘直南七八華里處」。本墓の詳細な出土狀況と墓誌全文は『唐長安城郊隋唐墓』に見える。なお、民國製地圖の當該地點に神鹿里の地名が見えている。

63 萬年縣所管の龍首郷の郷名のみの例は、大中九年没の劉君夫人霍氏墓誌（『金石萃編』卷一一四）に見える。

64 武氏云「此石於清光緒二年出土長安縣韋曲西北原上李王村。

郷蓋因川得名。是今韋曲一帶乃唐御宿郷也。』『元和郡縣圖志』卷一「御宿川、在縣南三十七里。」「長安志」卷十一「萬年縣條「御宿川、在縣西南四十里。」「ただし、隋墓誌例に御宿郷便子谷とあるように、隋代御宿郷は終南山北麓の便子谷をも含む、かなり南にまで廣がった郷域であったと考えられる。なお、大中年没の裴氏小娘子墓誌（『文物』一九七九・一六「從西安唐墓出土的非洲黑人陶俑談起」）に「長安里御宿川神禾原」と見え、位置比定の参考となる。

- 63 『嘉慶咸寧縣志』には出土地を示さず、「今石在杜曲」と記すのみである。『隋書』卷二九地理志京兆郡大興縣條「有後魏杜城縣・西霸城縣・西魏山北縣、並後周廢。」「元和郡縣圖志」卷一京兆府萬年縣條「萬年縣、……周明帝二年、分長安・霸城・山北等三縣、始於長安城中置萬年縣。」「讀史方輿紀要」卷五三長安縣杜陵城條「山北城、在今（西安）府東南五十里、後魏分長安・藍田二縣地置縣、屬京兆郡、後周廢。」などの記事が山北郷の位置比定の手掛りとなる。

- 64 『長安志』卷十一「萬年縣條「白鹿郷、在縣南四十五里、管邸五十。」「宋代白鹿郷の例は、天聖十年没の李士衡神道碑（『范文正公集』卷十一）に見える。

- 65 武氏云「此碑墓志一九五四年出土於郭家灘東國綿四廠基建工地、以位置推斷、此郷似在白鹿郷西、或並與之連接。」

- 66 永穆公主は玄宗の女で賢妃韋氏の母である。武氏が「又據（賢妃韋氏）誌知永穆公主是賢妃之母、畢氏援引顯誤」と指摘するように、白居易撰の永穆公主墓誌なるものは諸文獻に見えない。

- 69 武氏は『法苑珠林』を引くが（T38・389a）、續僧傳を引くべきは言うまでもない。ただ、「京東渭陰洪城坊側云々」の記事を渭陰郷の例とするのはやや疑問の餘地がありそうである。單に渭水の南の意かも知れない。

- 70 少陵郷以下の四郷は、『長安志』卷十一「萬年縣條に擧げる宋代七郷中、既述の唐郷と重複しないもの。

- 71 畢沅注「沆案、權德輿撰右僕射姚南仲神道碑（『權載之文集』卷一四）云、與夫人之殯、合祔于少陵原黃渠里。則是郷里名也。」「漢書」卷九七上外戚孝宣許皇后傳「許后立三年而崩、諡曰恭哀皇后、葬杜南、是杜陵南園。（師古曰、即今之所謂小陵者、去杜陵十八里。）」

- 72 『漢書』卷九七上外戚高祖薄姬傳「太后後文帝二歲、孝景前二年崩、葬南陵。（師古曰、薄太后陵在霸陵之南、故稱南陵、即今所謂薄陵。）」

- 73 武氏云「距今邵平店可能不遠、邵平曾爲秦東陵侯。」「史記」卷五三蕭相國世家「召平者、故秦東陵侯、秦破、爲布衣、貧、種瓜於長安城東、瓜美、故世俗謂之東陵瓜。」「水經注」卷十九渭水篇（『漢長安城東』第三門、本名霸城門、……亦曰青門、門外舊出好瓜、昔廣陵人邵平爲秦東陵侯、秦破爲布衣、種瓜此門、瓜美、故世謂之東陵瓜。」「民國製地圖によれば、邵平店は鵝橋鎮の東約四キロの主要道沿いに位置する。『史記』、『水經注』の記事からすれば、漢長安城のすぐ東に東陵郷を比定したい所だが、唐代にはこの地は禁苑であり、一般庶民居住區たる郷が置かれたとは考えられない。一應武氏の比定に従っておく。

74 武氏云「當是因唐禁苑之東而得名。」

75 『長安志』卷十二長安縣條「唐五十九鄉。有渭陰鄉、見于下、餘不傳。」『太平寰宇記』卷二五作「五十鄉」。

76 『元和郡縣圖志』卷一關內道一京兆府長安縣條「龍首山、在縣北一十里、長六十里、頭入渭水、尾達樊川。秦時有黑龍從南山出飲水、其行道因成土山、疏山爲臺殿、不假版築、高出長安城、西京賦所云疏龍首以抗殿也。」

77 『長安志』卷七「(外郭城)西面三門、北曰開遠門、中曰金光門(原注 西出趣昆明池)、南曰延平門。」

78 同前卷十二長安縣條「白帝壇、在縣西二十里開化(遠の誤)門外。」

79 長安縣管下龍首鄉の郷名のみの例は、永淳二年没の張懿墓誌(『八瓊室』卷三九)、天寶七載没の潘智昭墓誌(『金石萃編』卷八八)、天寶十二載没の張公夫人令狐氏墓誌(『八瓊室』卷五八)、大和四年没の劉瑛潤夫人楊琰墓誌(同前卷七二)などに見える。

80 『長安志』卷十二長安縣條「高陽原、在縣西南二十里。」

81 『金石續編』陸增祥按語「嘉慶二十五年出土、爲咸寧帖買裴修甫所得。……唐張貴然撰忠武將軍茹義忠神道碑、葬於長安縣永平鄉阿房殿之墟、此誌以阿城屬承平鄉、承・永字近、則承平鄉之阿城、即永平鄉之阿房殿也。今長安縣西二十里王寺殿有村、名東阿房宮・西阿房宮、蓋即其地。」

82 現在の西安飛行場は唐長安城郭内の地であり、武氏の云う出土地は具體的に何處なのか判然としない。なお、承平郷の郷名のみの例は、天寶十三載没の陳忠盛神道碑(『文苑英華』卷九三二)、天寶十四載没の張毗羅墓誌(『續陝西通志稿』卷一四七

『唐文拾遺』卷六八)、大曆十三年銘の普覺寺持律比丘心印記(『金石叢目分編』卷十二之一)に見える。

83 『長安志』卷十二長安縣條の畢沅注に擧げる。なお、前注82で陸增祥は承平郷と永平郷を同一郷と見なしているが、永平郷の例が複数存在するからには、別郷と見なす方が妥當であろう。

84 武氏云「今西安城南杜城西北有村名姜村、蓋即此郷所在。」杜城は民國製地圖にもしかるべき地に見える。前例に永壽郷高陽原とあるように、高陽郷に鄰近する位置に比定できよう。永壽郷をこのように比定すれば、杜城の位置ともうまく合致する。

85 『長安志』卷十二長安縣條「義陽郷、在縣西南二里、管布政里。」勞經原『唐折衝府考』卷一關內道條「(補)左威衛義陽(府)、『長安志』(卷二)唐京城朱雀街東第四街宣平坊義陽府(原注 貞觀中置)。」なお、宋代における義陽郷は、咸平三年没の宋湜神道碑に「長安縣義陽郷大郭里」(楊億撰『武夷新集』)とあることから、『長安志』の記事を確認することができる。

86 『長安志』卷十二長安縣條「昆明池、在縣西二十里、今爲民田。」『中國古代地理名著選讀』第一輯(中國科學院地理研究所編輯 一九五九 科學出版社)所載の侯仁之・黃盛璋兩氏による「水經注渭水篇譯注」に附された「水經注復原之漢長安附近水道圖」参照。

87 民國製地圖では、昆明池比定地の北鄰に白家庄、白店などの村落が存在している。

88 武氏云「以里程推斷、此郷當在龍首郷西。」

99 武氏云「龍首原的位置在長安之西偏北、前已有龍首鄉、此鄉蓋在其西。」

90 『法苑珠林』卷八五(T33・91a)では「京城西豐谷鄉南福水南史村」と作り、『太平廣記』卷一〇九では「出法苑珠林」として「唐郊南福水之陰有史村」とあり、それぞれ異同が目につく。『長安志』卷十一「萬年縣條」「福水、即交水也。水經注曰、上承樊川・御宿諸水、出縣南山石壁谷、南三十里、與直谷水合、亦曰子午谷水。」同卷十二「長安縣條」「澧谷水、合豐水、西北入城、經西市而入苑、沈水自南入焉、有福堰、下分爲二水、流一里、一水合郊水、一水西北流、又東流爲瀆、越沈水上過、名永安瀆。」

91 『長安志』卷十二「長安縣條」の畢沅注に挙げる。

92 『舊唐書』卷三八地理志「長安縣條」「長安、隋縣。乾封元年、分爲乾封縣、治懷直(貞の誤り)坊。長安三年廢、復併長安。」武氏云「杜永村名今尙存在、在今西安城南香積寺西北、是神禾原的這一帶在唐代爲萬春鄉地。」民國製地圖に杜永村は見えて

93 『金石萃編』王昶按語「碑書長安萬春鄉神和原、長安志作神禾原、……想皆通用也。」

94 『長安志』卷十二「長安縣條」「豐邑鄉、在縣西二十里。」

95 張家坡は、唐長安城西郭から約一六キロの豐河西岸の地。前掲「西安郊區隋唐墓地位置圖」参照。

96 武氏云「此墓志出土時地不詳。阿城原當即阿房宮城遺址所在之原、此鄉位置當在承平鄉西。」

97 『漢書』本文「文王作鄠」に對する師古注である。武氏は

『天下郡國利病書』卷五所引の范守己「雅談」に引用された師古注を例證とされるが、言うまでもなく『漢書』地理志から引用すべきである。また、靈臺郷の位置比定について武氏は「這所謂靈臺既在長安西北、當非周靈臺。郷名蓋因漢或後周的靈臺而起」とされるが、漢の靈臺は明堂北三百步(『水經注』卷一九)に位置する。つまり、漢長安城眞南の地で、豐水から大きく東にずれ、かつ唐の禁苑内に含まれる。『水經注』卷十九渭水篇に「豐水……又北、交水自東入焉。又北、昆明池水注之。又北逕靈臺西、又北至石墩、注于渭」とある周の靈臺址に因む郷名と見なすべきである。

98 武氏云「今西安城西南郭杜公社有大小居安二村、亦即高陽原所在、應即唐居安郷地。」民國製地圖には居安坊として見える。

99 出土地杈楊村の正確な位置が不明なために(民國製五萬分之一、十萬分之一地圖に見えない)、禮成郷と修仁郷の位置比定は保留せざるを得ないが、一應、武氏の「示意圖」に據っておく。

90 前注90で引用した『長安志』の豐谷水に關する「一水合郊水」の記事、すなわち、豐谷水と郊水の合流點附近に比定できよう。

91 『長安志』卷十二「長安縣條」「定昆池、在縣西南十五里。景龍文館記曰、安樂公主西莊、在京城西延平門外二十里司農郷、云々。」延平門については前注の參照。

92 同前卷十五「鄠縣條」「雲際山大定寺、在縣東南六十里、云々。

(原注)寺内有李順興先生古記云、順興初居長安大統郷昆明池南居賢郷、爲周太祖所重。今以所居郷置寺、以居賢人、號居賢

寺、因名邨爲居賢邨。順興、自魏武之初、隱居此山、念持金剛經、聚壘瓦塔、以記經數、南北三嶺、時稱爲中地土嶺也。其地舊有寺、周武末、寺廢。云々。」文脈から、周太祖は宇文泰、魏武は北魏末孝武帝であることは明らかで、大統郷という郷名も西魏の年號に因む命名であろう。従つて唐郷に數えるのは問題がある。また武氏は「李順興古記」を「嘉慶長安志」から引かれるが、宋敏求『長安志』を引用すべきことは言うまでもない。

(103) 『遊城南記』「嘗讀唐人詩集……蕭氏有蘭陵里梁升郷有安定莊、今皆湮沒、漫不可尋。」

(104) 善政郷以下の四郷は、『長安志』卷十二長安縣條に擧げる宋代六郷中、既述の唐郷と重複しないもの。

(105) 萬年縣管下郷として擧げた安寧郷と同一地か。だとすれば、唐安寧郷と宋同洛郷は重複する郷域ということになる。

(106) 居安郷と同一地であろう。ここにも唐郷里制崩壊後、宋代の郷再編による郷域擴大の例が認められる。

(107) 『長安志』卷十一萬年縣條「光泰門渡、在縣東二十里。(原注)入高陵・耀州路。」「唐兩京城坊攷」卷一西京禁苑條「東面二門、近北者昭遠門、次光泰門。(原注)門臨澧水、……程大昌云、光泰門在通化門北小城之東門、門東七里長樂坡。」同

卷首「西京三苑圖」、平岡武夫編『唐代の長安と洛陽・地圖篇』

圖版二二參照。

(108) これも禁苑東牆門に鄰接する、米倉村に至近の自然村であろう。

(109) 原文は「葬于樊村北渠、祖三藏法師塋也」である。玄奘の

葬地は『大慈恩寺三藏法師傳』卷十(T.50・278b)に「至總章二年四月八日、有敕、徙葬法師於樊川北原。」とある。著名な興教寺唐三藏塔である。従つてこの樊村は洪原郷内の自然村と見なすことができよう。前注(108)參照。

(110) 永壽郷内の自然村であろう。同名村は現在も存在する。前注(108)參照。

(111) 庫谷は『長安志』卷十一萬年縣條に「庫谷澗水、北流二十五里、合採谷水、下流入荆谷水、號澧水、下流二十五里、合霸水、號霸水、北流二里、入渭。」とある。また前注(108)參照。長安城東南の終南山中の地に比定できよう。

(112) 原文「長安縣故城、今謂之苑城、漢京兆府在故城南尚冠里、其縣理、今失其所、在長安。」

(113) 義陽郷内の自然村か。前注(108)參照。武氏が孝悌郷の例として引用する大中元年没の「内侍省令堵穎墓誌」(『續陝西通志稿』卷一五二)に、「權殯於長安縣龍首郷□嚴村買地一段、地主王公政。其小嚴村即開遠門外臨皋驛西南孝弟」とあり、武氏の言うように孝悌郷ではなく、明らかに龍首郷内の自然村としても小嚴村が存在する。

(114) 前注の參照。長安城西郭開遠門の次南が金光門であるから、この小嚴村は前注(113)で言及した龍首郷内のそれと同村の可能性が大きい。

(115) 『遊城南記』「杜甫何將軍山林詩有不識南塘路、今知第五橋。……今第五橋在韋曲之西、與沈家橋相近。……張注曰、第五橋、亦以姓名。」ここに引く杜甫詩とは、「陪鄭廣文遊何將軍山林十首」の一(『分門集註杜工部詩』卷十)で、第五橋に對

する注に「趙曰、於志、在萬年縣郊外之西南」とある。なお、吉川幸次郎博士『杜甫詩注』第二冊四五四～六一頁（筑摩書房一九七九）参照。第五村は、第五橋と同一地の同姓村であろう。民國製地圖では、豐水の西、秦渡鎮西方約六キロに第五橋の地名が見える。

(10) 前掲萬年縣姜尹村と同村か。だとすれば、一村が兩縣にまたがる例となる。

(11) 萬（万）字、元本および明本では万字に作る。『大正藏』校勘記参照。

(12) 『太平寰宇記』卷三河南府河南縣條「舊四十鄉、今四鄉十五坊。」

(13) 『水經注』卷十五澠水條「澠水又東南流、注于穀、穀水自千金塢東注、謂之千金渠也。」同卷十六穀水條「穀水又東流、逕乾祭門北、……東至千金塢。河南十二縣簿曰、河南縣城東十五里有千金塢。洛陽記曰、千金塢舊堰穀水、魏時更修此堰、謂之千金塢。」『洛陽伽藍記』卷四城西「長分橋西有千金堰、計其水利、日益千金、因以爲名。昔都水使者陳臨所造、今備夫一千、歲恆修之。」『舊唐書』卷一八七上忠義傳羅士信傳「及大軍至洛陽、士信以兵圍（王）世充千金堡。」

(14) 本墓誌は表記の墓地に續けて「其地南瞻伊闕、北帶長河、右顧王城、左逮平樂」と記し、千金郷と次掲平樂郷との相對的位置關係を示す語を含む。邱山から南向して、「左は平樂（郷）に逮ぶ」のであるから、千金郷の東鄰が平樂郷ということになる。

(15) 千金郷の郷名のみの諸例は、大業五年没の宮人元氏・李氏墓

誌（『漢魏南北朝墓誌集釋』卷十 圖版五三一・五三二）、大業六年没の宮人劉氏・程氏・馮氏・賈氏・朱氏墓誌（同前卷十 圖版五三三・五三四・五三五・五三六・五三七）、大業七年没の宮人郭氏・陳氏・李氏墓誌（同前 圖版五三八・五三九・五四〇）、大業七年没の孔神通墓誌（『芒洛冢墓遺文四編』卷一『漢魏南北朝』卷九 圖版四五五之二）、大業九年没の宮人陳氏・豆盧氏墓誌（『漢魏南北朝』卷十 圖版五四七・五四八）、大業十年没の宮人唐氏墓誌（同前卷十 圖版五五三）、大業十二年没の杜君夫人鄭善妃墓誌（同前卷十 圖版五五二）、武德九年没の關道愛墓誌（『芒洛』卷上）、貞觀二年没の郭通墓誌（『芒洛續補』卷十一）、龍朔元年没の竹氏墓誌（『芒洛續編』卷中）に見える。

(16) 『後漢書』靈帝紀中平五年十月條「甲子、帝自稱無上將軍、耀兵於平樂觀。」（注）平樂觀、在洛陽城西。『水經注』卷十六穀水條「穀水又南、逕平樂觀東、……明帝永平五年、長安迎取飛廉并銅馬、置上西門外平樂觀。今于上西門外無他基觀、惟西門外獨有此臺、巍然廣秀、疑即平樂觀也。又言、皇女稚塲、埋于臺側、故復名之曰皇女臺。」『資治通鑑』卷一八四隋義寧元年六月條「李密復帥衆向東都、丙申、大戰于平樂觀、（胡注）此蓋即漢魏平樂觀之地爲園也。然漢魏平樂觀、在洛城西、隋即遷營新都、則平樂觀當在都城東。」『讀史方輿紀要』卷四八洛陽縣條「平樂觀、……時（隋末）在東都之東十五里。」なお、現在も平樂觀ないし平樂郷に因なむと思われる平樂村がほぼ當該地（白馬寺西北西三キロ）に存在する（『文物』一九七八一七宿白「北魏洛陽城和北邙陵墓」所載「北魏長陵及其附近墓葬分布示意圖」及び「北魏洛陽郭城設計復原圖」参照）。



(四) 『舊唐書』卷三八地理志河南縣條「垂拱四年、分河南・洛陽置永昌縣、治於都內之道德坊。永昌元年、改河南爲合宮縣。神龍元年、復爲河南縣、廢永昌縣。三年、復爲合宮縣。景龍元年、復爲河南縣。」

(四) 『水經注』卷十六穀水條「穀水又東、枝分南入華林園、……其水東注天淵地、……池水又東流、入洛陽縣之南池、池即故翟泉也。南北百一十步、東西七十步。」『洛陽伽藍記』卷一城內「御道北有空池、擬作東宮、晉中朝時太倉處也。太倉南有翟泉、周迴三里。」この翟泉に因なむと思われる翟泉鎮という集落が現存する『考古學報』一九五五・九閏文儒「洛陽漢魏隋唐城址勘査記」所載「漢魏洛陽城實測圖」参照。ただ翟泉鎮は漢魏洛陽城西北隅の金墉城に西接する地にあり、前記二文獻に記す位置とは西北へ約二キロずれる。とにかく、唐代平樂郷翟村は、この翟泉に因むものと見なし得よう。なお、翟村の例は他にも、大業十年没の曹海凝墓誌(『芒洛四編』補遺)、龍朔元年没の王朗及夫人魏氏合附墓誌(『芒洛續編』卷中)に見える。

(四) 平樂郷の郷名のみの諸例は、仁壽四年没の劉寶及夫人王氏合附墓誌(『漢魏南北朝』卷八 圖版四一三)、總章元年没の王贊墓誌(『芒洛』卷上)、垂拱二年没の王行淹墓誌(『八瓊室』卷三九)、天寶元年没の萬年縣君杜氏墓誌(『集千家註杜工部文集』卷二)、天寶七載没の梁令珣墓誌(『芒洛』卷中)、貞元五年没の桑寧墓誌(同前卷中、『八瓊室』卷六六)、元和十二年没の盧君夫人崔氏墓誌(『芒洛』卷中)に見える。また、宋大中祥符三年没の石保吉神道碑に「河南府洛陽縣平樂郷宣武原」、その弟で咸平五年没の石保興神道碑に「河南洛陽縣平樂郷宣武村梓澤

原」(ともに『金石萃編』卷一二九)と見える。元豐二年没の張□之墓誌に「河南府河南縣宣武村」と見え、北魏宣武帝景陵に因む村名で、景陵は隋唐洛陽城北郭から北へ約六キロに位置する(『文物』一九七八・七黃明蘭「洛陽北魏景陵位置的確定和靜陵位置的推測」)。つまり、唐郷里制崩壊後の再編された宋代平樂郷郷域が、西へ大きく擴大している例を認めることができる。

(四) 『舊唐書』卷一七〇裴度傳「又於午橋創別墅、花木萬株、中起涼臺暑館、名曰綠野堂。」『唐兩京城坊攷』卷五通津渠條「通津渠、隋大業元年、開於午橋莊。(原注 在長夏門南五里。)西南二十里分雄堰引雒水、又于正南十八里龍門堰引伊水。(原注伊水在河南縣東南十八里。)」前掲閻氏論文所載の「隋唐東都城址實測圖」に、南郭外約一キロに東、中、西午橋の比定が示され、民國製地圖では、中午橋比定地に午橋という村落が實在している。龍門郷は、洛陽城南郊の龍門伊闕に因む郷名であることは確かであろう。郷名のみの例は、開元六年没の燕紹墓誌(『芒洛續補』)にも見える。また、宋康定二年没の李涪墓誌に「河南縣龍門郷」(『河南先生文集』卷十五)と見え、宋代にも龍門郷が存在していたことを知る。

(四) 伊洛郷は、伊水と洛水にはさまれた地區、すなわち、洛陽城東ないし東南に比定できよう。

(四) 伊洛の原義は、『汲冢周書』卷五度邑解第四十四に「自洛汭延於伊汭居陽、無固其有夏之居」とあるように、伊水と洛水が合流する地點の謂であるが、東の偃師縣内の地である。従って、河南縣伊洛郷は、「龍門天闕之南」とあることから、前記龍門郷の南の河南縣南端の地に比定せねばなるまい。宋天聖七

年没の劉燁墓誌に「河南縣伊納鄉尹樊里」(『河南先生文集』卷十三)と見え、訥と納は字義、字形ともに近いから、轉訛と考えられ、宋代にも同名郷が存在したことが知れる。

(12) 『漢書』卷二八上地理志八上河南郡條「河南(縣)、故鄭郷地、周武王遷九鼎、周公致太平、營以爲都、是爲王城、至平王居之。」『水經注』卷十五洛水篇「(洛水)枝瀆東北、歷制郷、逕河南縣王城西、歷鄭郷陌。杜預釋地曰、縣西有鄭郷陌、謂此也。枝瀆又北、入穀。」『新唐書』卷三八地理志三河南府條に折衝府三十九を擧げ、その一に鄭郷府が見える。鄭郷府は洛陽城内の洛陽縣進德坊に置かれた(『元河南志』卷一「唐兩京城坊攷」卷五)。谷氏前掲書鄭郷府條「括地志、故王城、一名河南城、本鄭郷、周公所築、在洛州河南縣北。鄭、山名。郷、城名。太平寰宇記、河南縣西南地、謂之鄭郷。」唐洛陽城の西郊、すなわち、周の洛邑の地は禁苑であり、鄭郷郷はその北に比定すべきであろう。

(13) 前注(12)参照。『水經注』に據るならば、王城郷は鄭郷郷の南西に鄰接する地に比定できよう。谷氏前掲書河南府條に王城府を擧げられるも、王城郷の位置比定に参考となるべき記述はない。

(14) 『元河南志』卷二後漢城闕宮殿古蹟條に「長樂觀、疑在北門外」とあり、同書卷首に附す「後漢東都城圖」では穀門外に長樂觀が見える。長樂觀の名稱が長樂觀に因むものとするれば、本郷は漢洛陽城の北に比定できる。ただし、『後漢書』傳卷七〇下文苑傳内高彪傳に見える長樂觀について、集解本では「惠棟曰、……又長樂、當作平樂」と云うが、無視できよう。

(15) 瀋水と澗水の二水に近鄰する邙山南麓の地に比定できよう。

(16) 洛陽城内河南縣に永泰坊あり。

(17) 『三國志』卷三魏明帝紀景初元年冬十月條「乙卯、營洛陽南委粟山爲園丘。」『水經注』卷十五伊水篇「伊水又東北、至洛陽縣南、逕園丘東、大魏郊天之所、準漢故事建之。」『資治通鑑』卷七三同前條胡注「魏氏春秋曰、洛陽有委粟山、在陰郷、魏時營爲園丘。孔穎達曰、委粟山在洛陽南二十里。」なお、前掲宿白論文所載「北魏洛陽郭城設計復原圖」参照。

(18) 『水經注』卷十六穀水條「穀水又東、左會金谷水、水出太白原、東南流、歷金谷、謂之金谷水、東南流、逕晉衛尉卿石崇之故居、……金谷水又東南流、入于穀。」『讀史方輿紀要』卷四八河南府條「金谷澗、在府城東北七里。」『新志』河南府條に金谷府を擧げ、『元河南志』卷一、「唐兩京城坊攷」卷五に城内洛陽縣興藝坊に置かれたとある。なお、宋元豐六年没の富弼神道碑に「河南府河南縣金谷郷南張里」(『蘇東坡集』卷三七)と見え、宋代にも同郷が存在したことを知る。

(19) 出土地は「邙山麓南約兩千米的平原地區」とある。

(20) 前注(18)参照。伊水に因む郷名であることは明白ながら、やや漠然として嚴密な比定が困難である。一應、洛陽城の南郊、ないし東南地區の伊水沿いの地に比定しておく。

(21) 穀水の北、すなわち、洛陽城北郊の邙山地區に比定できよう。『元河南志』卷二晉城闕宮殿古蹟條に「晉宮閣名曰、洛陽城中諸里、……穀陽里」と見え、晉洛陽城内に同名里が存在したことが知られるが、穀水はかなり頻繁に河道を變えており、直接むすびつけるのは危険と思われる。

(43) 陸機『洛陽記』（『文選』卷一六潘岳「閑居賦」李善注所引）

「靈臺、在洛陽南去城三里。」同前（『玉海』卷一六一所引）

「平昌門南直大道東是明堂、大道西是靈臺也。」『水經注』卷

十六穀水條「穀水又逕靈臺北、望雲物也。漢光武所築、高六丈、方二十步。」『洛陽伽藍記』卷三城南大統寺條「寺東有靈臺一所、基址雖頽、猶高五丈餘、即是漢光武帝所立者。」な

お、前掲閻氏論文、および中國社會科學院考古研究所洛陽工作隊「漢魏洛陽城南郊的靈臺遺址」（『考古』一九七八一一）參照。

(44) 後に注記したものを含めて、靈淵郷の存在を示す諸例は全て

隋代のもので、唐代の同名郷は検索できなかった。淵字は言うまでもなく唐高祖の諱であって、唐代では避諱されて本郷名は改稱されたはずである。舉げた諸例中に見える「東都西北十里」、「東都城北廿餘里」、「東都北十餘里」などの本郷に關する位置方向、本郷内の安川里や翟村の存在からすれば、唐代千金郷、平樂郷にまたがる隋代だけの郷名とも考えられる。

(44) 前述のように、千金郷に安川里が存在する。

(44) 前述のように、平樂郷に翟村が存在する。前注(44)參照。

(44) 『河南志』卷四「皇城、隋曰太微城、亦號南城。」『唐兩京

城坊攷』卷五東都皇城條「皇城傳宮城南、因隋名曰太微城、亦曰南城、又曰寶城。」靈淵郷の郷名のみの諸例は、大業六年没

の羊瑋墓誌（『漢魏南北朝』卷八 圖版四三九）、大業七年没の

高緊墓誌（同前卷九 圖版四五二）、大業八年没の張伏敬墓誌

（同前卷九 圖版四五四）、大業九年没の皇甫深墓誌（同前卷九 圖版四六一之二）、大業十一年没の荀君夫人宋玉艷墓誌（同前

卷九 圖版四八九之二）などに見えるが、全て隋郷である。

(44) 前述のように、淵と泉とは字義が相通ずるから、靈泉郷は靈淵郷と同郷であろう。

(44) 邱山の玄元皇帝廟、老子廟に因む郷であることは間違いない。杜甫の「冬日洛城北謁玄元皇帝廟」詩（『分門集註杜工部詩』卷六）、唐末の人柳璨の「移置玄元觀奏」（『全唐文』卷八三〇）に「玄元觀又在北山、若車馬出城、禮非便體、今欲只留

北邱山老君廟一所、其玄元觀請圻入都城、云々。」「劇談錄」に

「北邱山有玄元觀、觀南老君廟、廟有吳道子畫」、唐末杜光庭の『神仙感遇傳』卷四盧道流條に「自玄元觀欲入城（洛陽）、

路經穀水」などに見えるが、正確な位置ははっきりしない。比

定の手掛りは、本郷内の大翟村という村の存在で、前掲平樂郷

内の翟村と關連ありそうである。

(44) 洛陽城内河南縣に弘教坊あり。神龍初めに宣教坊と改稱。

(44) 向達『唐代長安與西域文明』（一九五七初版 七九再版 三聯書店）九〇頁にこの翟突娑墓誌を祇教徒の例として引き、

「河南郡雒陽縣崇業鄉嘉善里」とするが、河南縣の誤りであらう。

(44) 西晉の潘岳が官界で志を得ず、洛陽で自適の生活を送った晩

年の作「閑居賦」に因む郷名か。彼の居處は「閑居賦」（『文選』卷十六「晉書」卷五五本傳）に「於是退而閑居于洛之浹

身齊逸民、名綴下士。陪（本傳作背）京沔伊、面郊後市。……其西則有元戎禁營、玄幘（本傳作幕）綠微。……其東則有明堂辟雍、清穆敞閑。」と見え、西晉洛陽城の直南、明堂・辟雍の西と推定できる。しかし、閑居郷の位置は「（隋）東都城東北

九里」とあるから、南北方向にややずれた地に比定せねばなるまい。

049 洛陽城内河南縣に勸善坊あり。

050 洛陽城内洛陽縣に殖業坊あり。

051 洛陽城内河南縣に樂和坊あり。

052 洛陽城内河南縣に安衆坊あり。『元河南志』卷二に引く華延儻『洛陽記』に晉洛陽城の城門都亭を挙げ、その一に安衆亭の名が見える。

053 潘岳『西征賦』(『文選』卷十「爾乃越平樂、過街亭。」)『水經注』卷一五瀝水條「瀝水出河南穀城縣北山。縣北有營亭、瀝水出其北梓澤中、梓澤、地名也。……其水歷澤東南流、水西有一原、其上平敞、古營亭之處也。即潘安仁西征賦所謂越街郵者也。」宋劉敞之『永初山川記』(『漢唐地理書鈔』所收)「梓澤、地名。去王城二十四里。」『讀史方輿紀要』卷四八河南府洛陽縣條「穀城、府西北十八里故苑中、西臨穀水。」梓澤郷は瀝水上流の地に比定できよう。

054 洛陽城内河南縣に崇政坊あり。『元河南志』卷二晉城闕宮殿古蹟條「崇政殿、晉太子宮有崇政殿。」

055 洛陽城内河南縣に思順坊あり。

056 洛苑郷二例は宋郷であるが、参考までに挙げた。その位置は、唐洛陽城西郊の禁苑内であらう。『舊唐書』地理志東都條「禁苑、在都城之西。……苑城東面十七里、南面三十九里、西面五十里、北面二十里。」

057 『太平寰宇記』卷三河南府洛陽縣條「舊三十郷、今三郷四十三坊。」

058 『水經注』卷十六穀水條「穀水又東、逕廣莫門北、漢之穀門也。北對芒阜、連嶺脩亘、苞總衆山。始自洛口、西踰平陰、悉芒壠也。」『通典』卷一七七州縣七河南府洛陽縣條「漢平陰縣城、在縣北五十里。」

059 この陶村は河南縣管下とあるから、同名異村か。あるいは、一村が二縣にまたがる例かも知れない。

060 次掲の鳳臺郷と同一地であらう。だとすれば、隋代鳳臺郷あるいはその一部は、唐代平陰郷の鳳臺里に改編されたことになる。なお、平陰郷の郷名のみの諸例は、聖暦元年没の秦朗墓誌(『芒洛四編』卷四)、開元二十二年没の鄭誥墓誌(同前卷五)、開元二十九年没の范玄亮墓誌(『芒洛』卷中)、元和八年没の李君夫人王氏墓誌(同前卷中)、元和十二年葬の崔君及夫人鄭氏合耐墓誌(同前卷中)、大和六年没の馬傲墓誌(『芒洛四編』卷六)、咸通十年没の劉思友墓誌(同前卷六)などに見える。

061 これも前掲河南縣穀陽郷と重複する地である可能性がある。だとすれば、平陰、鳳臺、穀陽の三郷は相互に鄰接する地區と見なし得る。

062 以下の清風郷の諸例は、河南・洛陽兩縣名を冠して表記されているが、一應、洛陽縣管下に含めておく。あるいは、一郷が兩縣にまたがる例かも知れない。

063 前條とともに、前掲河南縣平樂郷と鄰接する可能性を示唆する。清風郷位置比定上、一つの手掛りとならう。なお、清風郷の郷名のみの諸例は、貞觀元年没の劉榮墓誌(『芒洛三編』)、龍朔元年没の郭壽墓誌(『芒洛四編』卷三)、景龍三年没の王行果神道碑(『文苑英華』卷九二二)、開元二年没の戴令言墓誌(『芒洛

四編(補遺)などに見え、また、貞元十六年没の呂府君夫人柳氏墓誌に「洛陽邙山清風原」と見える(『呂衡州文集』巻七)。

064 風と封とは全くの同音であるから、清風郷と清封郷は同一郷であることはほぼ確実である。

065 都會郷も河南・洛陽兩縣名を冠してあらわれる。その郷域が兩縣にまたがる可能性がある。

066 前掲洛陽縣平陰郷の王趙村と同一村か。

067 平洛郷は河南・洛陽のいずれの縣に屬するか不明。一應、洛陽縣管下に含めておく。宋淳化二年没の張郁墓誌に「洛陽縣平洛郷杜澤村」(『芒洛四編』巻六)、皇祐元年没の楊楷墓誌に「洛陽縣宣武管平洛郷」(『歐陽文忠公文集』巻二九)と見え、宋代洛陽縣に平洛郷が存在したことを知る。前注四で言及したように、宋代平樂郷に宣武村が存在し、また洛と樂とは音が近いから、平洛郷と平樂郷は同一郷の可能性がある。

068 『唐兩京城坊放』巻五東都外郭城「北面二門、東曰安喜門、西曰徽安門。(原注 蓋此門外即邙山)」。

069 同前同條「東面三門、北曰上東門。(原注 西對東城之宣仁門、隋曰上春、唐初改。)」したがって、上東郷は洛陽城東郭に接する地に比定できる。ただ、『水經注』巻十六穀水條に「穀水又東屈、南逕建春門石橋下、即上東門也。」とあり、『資治通鑑』卷二二「乾元二年九月條胡注に『水經注』前掲部分を引用した後に續けて「此言漢晉洛陽城諸門、非隋唐所徙洛城也。上東門之地、唐爲鎮。」と言う。漢晉洛陽城の上東門に因む郷名だとすれば、その比定位置は東へ十五キロ前後ずれることになる。

070 『資治通鑑』卷一八〇「隋仁壽四年條胡注「河陰縣、東魏置、屬洛陽郡、北對河陽岸。」本郷のおよその推定位置は、瀍水上

源の北、黃河南岸に近い邙山北麓の地、つまり、最北部の郷域に比定できよう。

071 郭思訓の弟で、開元九年没の郭思謨墓誌にその葬地を「洛陽東門平川」と記す。兄弟であるからその葬地は同一地の可能性が大きい。だとすれば、北部郷は洛陽城東郭に近い地に比定できよう。

072 『晉書』卷三武帝紀咸寧二年九月丁未條「起太倉於城東、常平倉於東西市。」(同卷二六食貨志では泰始四年にける。『洛陽記』(『太平御覽』卷一九一所引)「三市、大市名也。金市在大城西、南市在大城南、馬市在大城東。」本郷が晉の常平倉に因むものとしても、東西市のいずれに置かれた常平倉に因むものか、また、晉洛陽城の市が三市とも見え、正確な比定はむづかしい。晉洛陽城でないしその周邊であることは一應推定できる。常平郷の郷名のみの例は、大業三年没の孟孝敏夫人劉氏墓誌(『漢魏南北朝』巻九 圖版四四九)に見える。

073 『元河南志』巻二晉城關宮殿古蹟條「景福殿、……已上見晉宮闕名及洛陽宮殿簿。」

074 『元和郡縣圖志』巻五河南府偃師縣條「首陽山、在縣西北二十五里。」偃師縣と河南府との距離は、同前同條に「偃師縣、西南至府七十里」とあるから、首陽山は洛陽城東北約三十キロ前後となり、この山に因むと考えられる首陽郷の位置も自ずと比定できる。ただ、首陽郷は偃師縣管下の郷の可能性もなくはないが、本墓誌の銘文部分に「天向京兆、墳歸洛陽」と見える

ので洛陽に屬するものと考えておく。河南・洛陽いずれの縣に屬するかは不明。

075 賢相郷四例は宋郷であるが、参考のため挙げた。賢相郷下の陶村が平陰郷の同名村と、杜澤村が平洛郷の同名村と同一村と見なし得るならば、位置比定の手掛りとなるとともに、宋郷の郷域擴大の例ともなる。

076 黃明蘭「洛陽北魏景陵位置的確定和靜陵位置的推測」(『文物』一九七八・七)に引用されている。

077 『洛陽伽藍記』卷四城西法雲寺條(「征西將軍崔」)延伯出師於洛陽城西張方橋、即漢之夕陽亭也。『元河南志』卷二後漢城闕宮殿古蹟條「夕陽亭、城西。又按西晉賈充出鎮長安、百寮餞送於此、自旦及暮、故曰夕陽亭。疑因其舊名。」

078 敦煌で發見された所謂「郡縣公廨本錢簿」(殘縱三二センチ、横二七七センチ)は關内道、准内道等の各縣から兩京への距離、鄉數、公廨本錢額を記す貴重なものであるが、それによると、長安縣は七十九郷、萬年縣は六十二郷と記し、『長安志』などの記載よりかなり多くなっている。また洛陽に關する部分には殘念ながら缺けている。(『中國文物』第一號 一九七九)

079 最近の中文論考にまき引用される郭玉堂撰「洛陽出土石刻時地記」(洛陽大華書報供應社 一九四一)という書のあることが知れる。洛陽周邊から出土した墓誌銘など石刻史料の出土時期と出土地點が記されたものと推定される。本稿の洛陽に關する郷名檢索や地圖上への比定に貴重な材料を與えてくれる可能性をもつものと思われるが、殘念ながら未見である。

080 谷霽光『府兵制度考釋』参照。

比定圖作成には、五萬および十萬分の一圖をベース・マップとし、その他、以下の諸圖を適宜參考とした。

〔長安郊區〕

清畢沅撰『關中勝蹟圖志』卷首「西安府疆域圖」

『嘉慶長安縣志』唐疆域圖

『嘉慶咸寧縣志』同右

足立喜六「長安史蹟の研究」卷末附圖「西安附近古蹟圖」・「西安近郊地形圖」

平岡武夫編「唐代研究のしおり」「長安と洛陽 地圖篇」

俞偉超「西安白鹿原墓葬發掘報告」圖一「西安城東地形圖」

『考古學報』一九五六・一三

侯仁之・黃盛璋「水經注渭水篇選釋」圖三「根據水經注復原之漢長安附近水道圖」(『中國古代地理名著選讀』第一輯 一九五

九)

武伯倫「唐萬年・長安縣鄉里考」附「唐長安郊區萬年・長安縣鄉里位置示意圖」(『考古學報』一九六三・一)

『西安郊區隋唐墓』圖一「西安郊區隋唐墓地位置圖」(一九六

六)

宿白「隋唐長安和洛陽城」圖三「隋大興・唐長安城布局的復原」(『考古』一九七八・六)

『唐長安城郊隋唐墓』圖一「墓葬分布位置圖」(一九八〇)

〔洛陽郊區〕

楊守敬「水經注圖」卷末「洛陽城圖(穀水篇)」

閻文儒「洛陽漢魏隋唐城址勘查記」插圖三「漢魏洛陽城實測

圖「同四「隋唐東都城址實測圖」(『考古學報』一九五五—九) 范祥雍『洛陽伽藍記校注』卷末「洛陽伽藍記圖」(一九五八初版 七八再版)

中國社會科學院考古研究所洛陽工作隊「隋唐東都城址的勘查和發掘續記」圖八「唐洛陽城實測圖」(『考古』一九七八—六)

宿白前揭論文圖六「隋唐洛陽城的復原」

宿白「北魏洛陽城和北邙陵墓」圖版四「北魏洛陽郭城設計復原圖」・圖一「北魏長陵及其附近墓葬分布示意圖」・圖二「洛陽北

郊北魏皇室墓地布局示意圖」(『文物』一九七八—七)

(補注)

印刷中になって、西京長安縣管下の郷を敦煌文書中に一例見出したので補っておく。

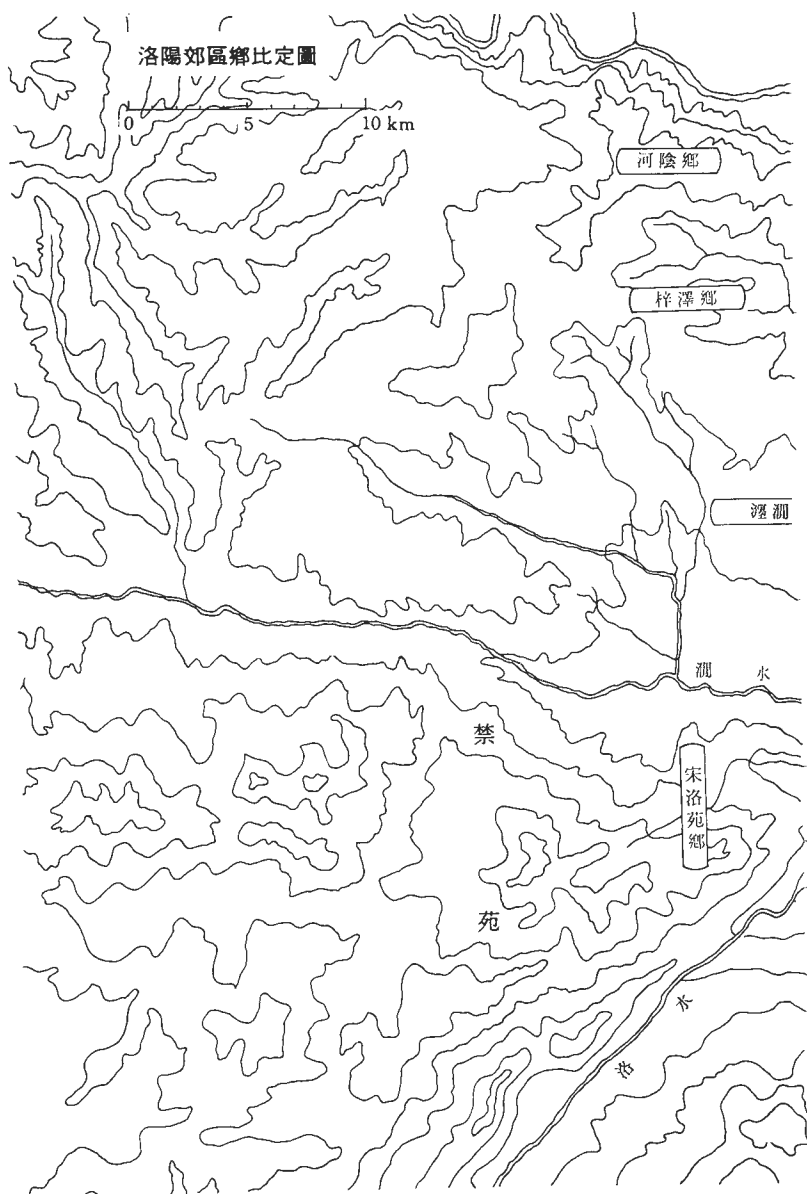
Pelliot No. 3417「唐景雲二年道士王景仙從雍州長安縣懷陰郷東明觀三洞法師中岳先生張泰受十戒十四持身品牒」。(『敦煌遺書總目索引』一九六二 商務印書館 二八六頁) この懷陰郷の索出で、長安縣管下郷の索出数は三十四郷となる。











CONCERNING THE ADMINISTRATIVE UNITS OF THE  
*XIANG* 鄉, *LI* 里, AND *CUN* 村 IN THE SUBURBS  
OF CHANG'AN 長安 AND LUOYANG 洛陽 DURING  
THE TANG 唐 PERIOD

OTAGI Hajime

Many studies have been made now about the cities of Chang'an and Luoyang as they existed during the Tang period. Such research has benefited considerably from the published results of recent archaeological excavations made at their actual sites.

Each of these studies however has considered only the sites at the urban center of these cities, to the exclusion of those in outlying areas. In this essay, I will try to define the Tang system of local administration by means of an analysis of sites in the suburbs of these two capital cities. Using the sources available, I located 76 *xiang* out of the 104 recorded to have made up the district of Chang'an, and 49 *xiang* out of 70 recorded *xiang* for the district of Luoyang. Their locations were then mapped.

The following observations resulted.

Under certain circumstances, segments of the population of a single village were assigned to different districts. The administrative units of the *xiang* and *li* were determined by a fixed number of families, regardless of the village to which they belonged.

In most cases, it is possible to trace the Tang names of the *xiang*, as well as their geographical boundaries, from the previous Sui 隋 period. This indicates that the system of local administration at this level was historically continuous. Furthermore, many of the *xiang* are named after rivers, mountains or historical relics within their borders.

Many of the *li*, however, are named with Confucian philosophical terms. These names often changed when the unit was reorganized. This indicates that the *li*, unlike the *xiang*, was regarded as the more fundamental and more significant unit of the system of local administration.

Finally, the names of several *xiang* correspond with terms used in the *zhechongfu* 折衝府 system. This suggests that the organization of the *xiangli* system was closely connected with that of the *fubing* 府兵 system. This relation remains to be researched.